
真・恋姫?無双 ~ 大空を司る少年 ~

風神

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫？無双 ～大空を司る少年～

【Nコード】

N2939T

【作者名】

風神

【あらすじ】

「んじゃ、過去に逝って来い」「字がちがーうー!!?」。
。「」。「ジャンニーニの発明で過去に飛ばされたツナ。飛ばされた先は後漢の時代。しかし有名な武将は全員女だった！ツナはこの世界で何をするのか!？」

プロローグ（前書き）

完全に衝動書きです。すみません。でも、やるからには頑張っ
て続
けますのでよろしくお願いします！

プロローグ

「出来ました！ 出来ましたよ！十代目！」

「ジャンニーニ！ 一体どうしたの！？」

沢田家。伝統・格式・規模・勢力すべてにおいて別格といわれるイタリアの最大手マフィアグループ、ボンゴレファミリーの十代目ボス、沢田綱吉（通称ツナ）は突然現れたボンゴレファミリー専属の武器チューナー、ジャンニーニに驚く。ツナは、古里炎真率いるシモンファミリーとの戦いで、ボンゴレ初代ボスとシモン・コザアードの誤解が解け、やっと平穏な生活を手に入れたのである。

「ついに出来たのですよ！ 十代目！」

「出来たって・・・何が？」

「これです！！」

「え！？ これって、『十年バズーカ』じゃないか！？」

ジャンニーニが見せてきたのはボスであるツナを守護するための仲間の中の一人、雷の守護者ランボが持っている被弾したものは十年後の自分と入れ変わる十年バズーカであった。しかしよく見るとジャンニーニの持っている十年バズーカは普通の紫色ではなく、濃い青色をしていた。

「ちっちゃっち、これは十年バズーカであって十年バズーカではないのです」

「どづいつことだよ？」

「これは十年後の未来の自分では無く、十年前の過去の自分と入れ替わる十年バズーカなのです！」

「か、過去……!?」

過去に行く十年バズーカ。そんなものを作ったジャンニーニは凄いとしかかなくというか……。そう思いながらマジマジとジャンニーニが持っている十年バズーカを見ていると後ろから声が聞こえた。

「おもしろそーじゃねーか。ちよっくら十年前に行って来い。ツナ」

「リ、リポーン!!!」

ツナの後ろから聞こえてきた声はツナをここまで鍛え上げ、立派なマフィアのボスに仕立て上げた張本人。アルコバレーノのリポーンがいた。リポーンはジャンニーニのところまでジャンプで行くとその手から青い十年バズーカを奪い取る。

「ああ！ リポーンさん！ まだ試作品なんですから乱暴に扱わないでください！」

「いいじゃねーか少しくらい。んじゃ、さっそく行くぞツナ」

ジャキ。そう言いながらツナに十年バズーカを構えるリポーン。構えられたツナは一気に慌てる。

「な、ななな、何言っただよりポーン！ 十年前に行って未来を

変えたらどーすんだよ！ やめろって！！」

必死に訴えるツナだがそんなことをリボーンが受け付けるはずもなく、

「うるせーぞ。さっさと逝きやがれ」

「字がちがー！ー！ーう！！！？（。。；）」

ドカーン！

過去へ向かう十年バズーカがツナに被弾し周りに青い煙がまき散らされた。そしてその煙が晴れるころにはその場にツナの姿はなくなっていた。

「ああ！ 十代目！」

「フツ、おもしれーことになってきたな」

慌てるジャンニーニとは逆にリボーンはこれから起こることを考え、含みのある笑みを浮かべてた。

「おいテメエ！いい服着てるじゃねえか」

「なんだな」

「兄貴、こいついいとこのぼっちゃんかなんかじゃないですか？」

あまり友好関係を築けるとは思えないが。

「え、え、何！？ この人たち！？」

プロローグ（後書き）

うゝん・・・魏、呉、蜀。どの にしたらいいか・・・。ご意見ご感想宜しくお願いします。

主人公設定（前書き）

うわっ、多！ 結構うざいかもしれませんがツナのことを知らない人は呼んだ方がいいです。

主人公設定

人物

10月14日生まれの14歳天秤座でA型。家光と奈々を両親に持つ日本人だが、イタリア人のボンゴレ？世（後に日本に渡り「沢田家康」と改名）を曾曾曾祖父に持つ身長157cm、体重46.5kg。子供の頃の夢は巨大ロボになること。将来の夢は笹川京子との結婚だったがだんだんとその思いは昇華して今では憧れの存在になっっている。

基本的な通称は「ツナ（君・さん）」。勉強も運動も苦手は何をやらせても冴えないため、クラスメートからは「ダメツナ」と呼ばれていた。一人称は「オレ」。非常識な出来事を受け入れてしまう人物が多い原作において、数少ないツツコミキャラ・常識人である。また、今作中でも全くボケを行うことのないキャラ。

性格

当初は何かにつけて気弱で逃げ腰かつ諦めがちな性格であったが、原作の進行につれて次第と正義感や勇気を持つ性格に成長していく。元来争いを好まない優しい性格の持ち主であり、歴代ボンゴレボスの中でも特に穏健派と言われるボンゴレ？世ですら「マフィアのボスにはあまりにも不向き」と言わしめ、六道骸からも度々「その甘さが命取りだ」などと指摘されている。力みすぎて空回りした時には、リボンから「おまえはヒーローになんてなれない男」と諭されたこともある。

超死ぬ気モードでは普段とは打って変わって冷静沈着な言動が目立

つが、それでも戦闘中ですら非情になることはなく、相手に対し同情することもある。

交友関係

優しい性格で面倒見がよく、沢田家で居候となっっているランボやイーピン、フウ太とは本当の兄弟のような関係を築いていたため、この世界でも鈴々や季衣とよく遊ぶ。ツナ本人は同じ並盛中に通う笹川京子に思いを寄せていたが今ではタダのあこがれの存在になり、恋愛感情はない。その優しさから次々とこの世界の女性たちを落とすしていくが、ツナ本人は全く気付かない。もともと鈍感であったツナがリボンにあっってから色々な事が起こり恋どころではなくなってしまうため鈍感に拍車がかかって、彼女たち曰く『呪い級』までのぼりつめたのが原因らしい。

武器・技

XグローブVer.X（イクスグローブバージョンイクス）：レオンによって生み出されたツナ専用のアイテム。死ぬ気弾や小言弾を受けたり死ぬ気丸を服用しなければ死ぬ気にはならなかったがこの世界に来てからは何故か服用しなくても超死ぬ気になれる。普段は手の甲部分に27（ツナ）と刺繍してあるミトンだが、「死ぬ気モード」となった時だけ、手の甲部分にXの刻印が入った特殊なグローブに変わる。元は黒っぽい色であったが、今ではツナ専用の赤いグローブへと代わった。

大空のリングVer.X：ツナの持つ、ナッツのボンゴレ匣とボンゴレリングを融合させたツナのリング。大空の炎を灯すことでアニマルボックスであるナッツを呼び出すことが出来、ボンゴレのボス

である証である。

ナツツVer．X：大空のリングと融合したツナの匣兵器。通常の「天空ライオン」と同様の周囲の環境と調和させる雄叫びのほか、カンビオ・フォルマ形態変化によって姿を変えることができる。性格は正にツナの心を映し出しており、平常時はメチャクチャ臆病だがいざという時は抜群の力を発揮する。

イクス X バーナー BURNER：スパナから提供されたコンタクトディスプレイによってブレなく放つことが可能となったツナの必殺技。コンタクトディスプレイはスパナがツナのために作り上げたX BURNER専用アイテム。ツナが装着しているヘッドフォンと音声で連動しており、情報は耳からも伝えられる。ツナの「オペレーションX」イクスのかけ声とともに、自動的にX BURNERを安定に発射する誘導プログラムを開始する。

死ぬ気の零地点突破・ファースト初代エディション：ボンゴレ初代ボスが使ったとされる伝説的な技で、自らの死ぬ気の炎を強力な冷氣に変換して対象を凍らせることができる。その威力は強力で多重層16300層まで凍らせるほどである。氷は死ぬ気のような超圧縮エネルギーのため通常は溶けることはなく、死ぬ気の炎でのみ解凍することができる。この技は身内同士の対決となったときのため、死ぬ気の炎を封印するために初代ボンゴレによって編み出されている。

主人公設定（後書き）

さあ！ 次回から本編突入だ！

第一席 出会い、来る！（前書き）

最後がなんかグダグダ・・・。始まります。

第一席 出会い、来る！

「おいテメエ！いい服着てるじゃねえか」

「なんだな」

「兄貴、こいついいとこのぼっちゃんかなんかじゃないですか？」

ただいまツナは混乱中。理由は簡単。いきなりわけのわからないところに落とされ、さらには目の前でわけのわからない人が下品な笑いを上げているからだ。

「（え？ え？ 何この人たち？ 昔の中国みたいな服着てるし・
・本当にここどこ！？）」

「おい、聞いてんのか！？」

「ひゃい！？」

するとこの三人組のリーダーのような人がツナに怒鳴りかかる。ツナはびっくりして嘔みながら返事をした。男はツナが気弱な性格と判断したのかさつきより強めの口調で言う。

「金目の物を置いていけ。たとえばその指輪なんかな・・・」

「お、置いて行くんだなあ」

「そつだそつだ」

男の言葉に同調する他二人。追剥だ。ツナは一瞬で理解した。だが死ぬ気モードではないツナにとっては追剥どころかただの犬でさえも怖いのだ。そんなツナが追剥に立ち向かうはずがない。しかしこのリングだけは譲れなかった。

「ダッ、ダメです！ これはどんなことがあっても渡せません！」
気弱だと思っていた少年がまさかの反抗。男は少しうろたえたがまた強い口調で怒鳴る。

「渡せつつてんだろ！！！」

「ダメです！！！」

ガンとして譲らないツナ。イライラが頂点に達した男は腰に差していた剣を抜く。

「アア！？ なんだとお前！？ なら力づくで奪うまでだ！！！」

そういつて男は手に持っていた剣を振り上げツナに振り落とそうとした。その時、

「までえい！！！」

女性の声が聞こえた。

時は戻って数分前。

「は、いい天気ですね」

そう言うこの少女は姓を程、名を立、字を仲徳、真名は風という。その風の言葉に二人の女性が答える。

「ええ、そうですね」

「そうだな」

最初に答えたのは稟。姓を郭、名を嘉、字を奉孝、真名は稟という。そして次に答えたのは星。姓を趙、名を雲、字を子龍、真名を星という。三人とも、真名をそのまま表したような容姿をしている。すると稟が言葉を続ける。

「ですが風、いくら次の町まで距離がないとしてもいささかゆっくりしすぎなのでは？」

稟の意見に風は言葉を詰まらせる。

「む……ぐう」

「寝るな！」

「やれやれ、日暮れまでには次の町に到着できそうだな」

いつもの二人のやり取りに呆れたように星は言うがこの二人のおかげでどれだけ助けられたかは数えても数え切れない。そう思っつてフと空を見上げてみるとそこには一筋の流れ星が流れていた。

「ん？あれは……」

「おお、流れ星ですね」

「こんな昼間にか……面妖な」

そう言っているうちにも流れ星はどんどん地上に落ちて行く感じがしてくる。

「あの流れ星、この先に墜ちていくように見えますね」

「そうだな」

「そうだな、じゃなくて……あれは墜ちているんですよ！」

「相変わらず的確な突っ込みですね」

流星は眩い光を発しながら、星たちが向かう先へ墜ちていった。それを三人が見届けると星が口を開く。

「二人が良かったら、見に行ってみないか？」

星の言葉に目を見開く稟。

「星！」

「風は賛成です」

風もおもしろそうと言いながら手を上げる。

「ちょっと風！」

「と、言うことだが、稟はどうする？」

「……二人が行くのに私だけ行かないというわけにはいかないですよ」

「と、い、い、つ、つ、し、っ、か、り、体、は、反、応、し、て、し、ま、つ、お、ぼ、こ、な、稟、ち、ゃ、ん、な、の、で、し、た、」

「ちょっと風！あ、星、待ちなさい！」

騒いでいる稟と風をおいて、星は流星が墜ちたとおぼしき場所へ向かったのだった。

「ん？ あれは！」

稟たちと流れ星を探して数分。星が歩いていると、賊らしき三人組が見るからに気弱そうな少年に向かって剣を振りおろそうとしてい

る光景が目に入った。

「賊か！」

そう言っただけ走り出す星。

「え？　ってあ！　星！！！」

「……行ってしまいましたね……」

「仕方がない。私たちも行くか」

「はい」

二人は呆れながらも走って行った星を追いかけて行ったのだった。

「まてえい！！！」

響く声。その声はもう少しでツナの額に届くはずであった剣を止めた。

「たった一人の庶人相手に三人がかりで襲いかかるなど……その所業、言語道断！！！」

「あア？」

「そんな貴様らが如き下郎に名乗る名など、無い!!!」

「……は ……？」

誰も名前は聞いちゃいないだろう。その場にいた四人全員が思ったが、それを口にする間はなかった。声が響くや否や、口上の主は一瞬で三人の中で最も大柄な男を打ち倒したからだ。

「な、なんだこいつ……がっ!!!」

矢継ぎ早に槍を翻し、今度は小男を吹き飛ばす。ツナはその神速の槍を見て驚く。何故ならその主は女だったからだ。見ればまだ二十歳にも手が届きそうにない、切れ長の目を持つ美少女。

「なんだなんだ。所詮は弱者をいたぶることしか出来ん三下か？」

少女は、少し大袈裟に鼻を鳴らして笑い、三人組を挑発してみせた。しかし三人はその挑発に乗ることはなく、

「ちっ……逃げろぞ、お前ら！」

力の差を理解したのだろう、男は倒れた舎弟を連れて早々に逃げ去った。

仲間を見捨てないところだけは見上げた根性というべきか。が、

「逃がすものか!!!」

少女は追い払うだけでは足りなかったのか、逃げて行った賊を追って走り去ってしまった。

「……おい」

そして一人、人畜無害で気弱な顔をした少年だけが残された。せつかく逢えた人間に置いてけぼりにされ、また一人になる。とはいえ、難を取り去ってくれたことには感謝しなければいけないが。

「大丈夫ですかー？」

「え？」

残念がったツナの後ろからかけられた声は、おっとりと間延びした少女の声。見れば自分の胸の高さほどの身長の小柄な女の子が立っている。

「大丈夫か？ 怪我は無いようだが……風、一応包帯を」

「もうないですよー。こないだ稟ちゃんが全部使っちゃったじゃないですかー」

「……そうだったっけ？」

そしてもう一人、今度も女性。こちらは少し大人びた、いかにもしつかりした感じの女性。そして目にはやや縁の角ばった眼鏡をかけている。眼鏡自体あまり珍しいものではないがやはりこの女の人も変わった服装をしていた。

「あの、大丈夫です。ありがとうございます」

「そうですかー？ それはなによりですね」

ツナの言葉におっとりとした少女が本当に安心したような表情をする。そして、この少女もツナたちと同じような格好をしている。おっとりした方の少女が着ている服は、ふわふわとしたことなく明風の装束である。しかし、東洋系の顔立ちながら外国人のような美しい金髪をもっている。眼鏡の彼女の方は黒のおとなしい色ではあるが、これまた外国の貴族がするような袖が肘のやや下まである形の手袋。身に着けているのはスラっとした足元が露わになっている一つなぎの服、そこから覗く脚にも太腿まである丈の長い靴下を履いている。そして、

「やれやれ。すまん、逃げられた」

賊を追って行った例の少女が帰ってきた。彼女の格好もまた変わっている。昔の日本人が履くような靴に、変わった形の帽子。そして異常なほど丈が短く、露出の多い振袖。どうやったたらあの底の高い靴であれば速く走ることができるのか。謎である。

「星ちゃんおかえりなさい。……盗賊さんたち、馬でも使ってたんですか？」

「うむ。同じ二本足なら負ける気はせんが、倍の数で挑まれてはな」

「まあ、追い払えただけでも十分ですよー」

馬を追いかけて行ったのか。随分無茶をする。しかし、かなりの速さで疾走したはずなのに彼女の息は一つも乱れていない。先ほどの槍といい、相当の手練なんだろうとツナは思った。

「それにしても災難でしたね。この辺りは盗賊が比較的少ない地域なんですけど……」

眼鏡の女性がそう言って災難を労わってくれた。

「え、あ、はい。本当にありがとうございます」

「いいんですよ」

両手を振りながらそういう少女。優しんだなーこの子は。ツナがそう思っているのとフとある疑問が頭をよぎる。ここは本当に日本なんだろうか？ 着物にしては動きやすいし、何より十年でこんなに変わるはずがない。ツナは取り敢えず目の前にいる少女たちに聞いてみることにした。

「えっ……と……。星でいいのかな？」

「……なっ！？」「」

ツナが星の名前を言った瞬間、三人は信じられないと言ったような顔をし、ツナは名前を呼んだ星という少女に持っていた槍を突きつけられた。

「えっ！？ え！？ オレ何かした！？」

何故いきなり少女に槍を突きつけられたのか全く分からないツナは、この状況に思いつきり慌てる。

「お主、何故世間知らずかは知らんが、いきなり人の真名を呼ぶと

は、一体どういう見だ!？」

凄い形相でツナを睨みつける星。ツナは星が言った真名というものにまったく聞き覚えがなかった。

「真名？」

「訂正しろ!？ さもなくば……」

「わっ、わかりましたわかりました！ 訂正します！ すみませんでした！」

「……」

「……」

しばらくの沈黙。すると星は槍を下ろし構えを止めた。

「よかろう……。今回は許してやる」

「はぁー！。どうなることかと思ったー」

緊張が解けたのかツナは槍下ろされた瞬間、すんと地面に座り込んだ。その様子が面白かったのか、星の後ろにいた風と稟はクスクスと笑っている。すると星がツナの方に手を差し伸べ、ツナを立ち上がらせた。

「あの、すみません。なんかオレ気に触っちゃうこと言ったみたいで……。オレ、沢田綱吉っていいいます。皆さんのことは何て呼んだらいいんですか？」

「趙雲」

「程立と呼んでくださいーい」

「私は戯志才と名乗っております」

「え？ 趙雲に程立に戯志才？」

ツナにはこの少女たちの名前に聞き覚えがあつた。それは前、半ば無理やりリボーンに覚えさせられた三国しの登場人物と同じ名前だつたのだ。

「（え！？ この人たちの名前つて、三国志！？ じゃあここ中国！？・・・でも、これに出てくる人つてほとんど男だけだったよな・・・）」

わけがわからない。そう思いながらフと脳内の会議から外に出て目の前を見ると、そこには視界いっぱい星の顔がうつっていた。

「うわっ!?!」

ツナは驚いて後ずさりする。

「ん？ ああ、悪い。あまりにも考えにふけていたようだったのだな。それにしても変わった格好だな」

「名前も変わっていますしねー」

「さしずめ姓が沢田、名が綱、字が吉といったところでしょうか」

「いえ。姓が沢田、名が綱吉です。字はありません」

字はない。ツナの発言に三人は驚いた顔をする。

「字がない？ 珍しいな」

「そうですか？ あと、もう一つ質問があるんせすけど・・・」

「何ですかー？」

「“真名”って、なんですか？」

「「「「「「「「「「は？」」」」」」」」

少し間を置いてふめけた声をだす風たち。

「お主、真名をしらぬのか？」

ツナはあははと言いながら頭をかく。

「正直、ここはどこなのかやなんでオレがここにいるのかすらもわかんなくて・・・」

「うーん、こうなるとこの人があの『天の御遣い様』なのかもしれませんか・・・」

「天の御遣い様？」

「それについては風が話しましょう！ 実はですねー・・・」

「待て、風」

風がツナに天の御遣いについて話そうとしたその時、ふいに稟がそれを遮った。風はブーブーと言っているようだが、遠くの方を見て真剣な顔になっている稟を見て同じく真剣な顔になる。よくみると星もそうだった。ツナはなにがあったのか知るため、稟たちが向いている方向をみると遠方からとてもおおきな砂塵がみえた。

「どうやら陳留の刺史殿がきたようだ」

「今関わり合いになるのは避けたいところですね……行きますか？」

戯志才のその言葉に、趙雲と程立は顔を見合わせて小さく頷く。

「あ、そーだ。よかつたらお兄さんも一緒に行きませんか？」

「え？ いいの？」

「ふむ……私はいいと思うぞ」

「え？」

程立の提案に思わず聞き返してしまったツナ。趙雲は賛成のようで、戯志才は若干驚いているようだった。

「本気ですか？」

「ええ、少々思う所がありまして、このお兄さんがいったい何者

「え？ どうしたんですか？」

「……なっ、なんでもない（ぞ）（です）／／／／」

「そ、そうですね。もし気分が悪かったら無理しないでくださいね」

「……いや、あなたのせいだから」

なにか突っ込まれた気がするツナだが、取り敢えず四人はその場を移動した。

第二席 『大空の御遣い』、来る！（前書き）

ちよつと短いかな……。まだ が確定していません！ どしどし
感想、意見、訂正を送ってください！

第二席 『大空の御遣い』、来る！

あれからしばらくして、ツナは近くの街に向かう間、風たちに真名のこと、この世界のこと、風たちの目的、さまざまなことを聞いた。どれも信じ難いもののだが、きっとこれもジャンニー二の十年バズーカのせいなのだろうと無理やり納得し、ツナのほうも自分のことを出来るだけ簡単に説明した。

「えーっと、つまり要約すると、ここは後漢で、真名っていうのは許された人以外が言ったら首をはねられても文句を言えないほど神聖なもので、今の程立たちはどこかの有力な軍に士官するために旅をしている……でよかったですか？」

「ああ、間違いはない。それにしても本当に沢田殿はなにも知らないのだな」

「お兄さんの目を見ればさっき言っていたずっと先の未来からやってきたというのも嘘ではないでしょうし、やはりお兄さんが噂の天の御遣い様なのかもしれませぬねー」

「あ、そういえばその天の御遣い様についてはまだはなしてもらってなかったね。それってなんなの？」

ツナが風にそう聞くと、さっきまで後ろで黙ってついてきていた稟が口を開く。

「私が説明しましょう」

稟の説明ではこうだ。

今から数ヶ月前、管輅という占い師がある予言を言った。その予言は噂となり、多少形を変えながらもすさまじい勢いで大陸全土に広まった。当然、この三人にも。

『流星とともにこの地に降り立つ天からの遣いが動乱のこの世を太平へと導くであろう』・・・と。

その話しを聞いたツナは大慌てで首を振る。

「え！？ オレそんなたいそうなこと出来ませんよ！ 人違いですつて！」

「しかし沢田さん。あなたは御自分で未来から来たとおっしゃったではありませんか。それにその絹とも木綿ともいえない貴族の方が着られるような白と黒の混ざった服。私はそのようなものを見たことがありません。そして決定打として私たちはあなたと出会う前に流れ星を見ているのです」

「流れ星？」

「ええ、この風が」

そう言っつて風を見る稟。つられてツナも彼女の方を見る……
が、

「……………」

「……………風？」

「・・・・・・・・くう」

「寝るな！」

「はっ！」

気持ち良さそうに寝ていた。しかも普通に歩きながら・・・。

「おお！？ 風としたことがうっかりと」

「（うっかりであんな歩くと寝るが同時に出来るの！？）」

心の中でツッコむツナだが、そのツッコみは風にとどくはずもなく話し始める。

「えっとですねー、こう、空を見ていたらですねー、それはもう昼の空でもくっきり見える鮮やかな流れ星が流れてたのですよー」

「それって、さっき戯志才さんが言っていた流れ星と共に・・・ってやつ？」

「そうなのですー。流れ星と言動、風体を見てお兄さんが天の御遣いだとおもいましたー」

なるほど。それだけ条件がそろっていれば自分が天の御遣いだと思われても仕方がないだろう。ツナは少し何かつつかかるような気がするが、そう思うと三人の方を向く。

「そこまで条件があっているのならオレが天の御遣いなのかもしれないですね」

「ならば……その御通信いはこの乱世の世界でなにを成すつもりなのだ？」

真剣な顔でそう聞く星。他の二人も真剣な顔でツナをみている。ツナはその雰囲気に少したじろぎながらもこう答える。

「急にそんなこと聞かれてもオレには答えられません。実際にオレがこの大陸を平和にするっていつても、まだ何をしたらいいのかわからないし……。あ、でもこれだけは言えます。『手のとどく範囲の全ての人はオレが守る』。多分これがオレの今出来る最大のことなんです」

「それが赤の他人であつてもか？」

「他人かどうかなんて関係ありませんよ。守りたいから守る。現に趙雲さんだって他人のオレを助けてくれたじゃないですか」

「……」

思つても見なかった答えだったのか、すこし三人は驚いた顔をしていたが、突然趙雲が微笑み、口をひらく。

「フツ、そうですね。貴殿のその思い……確かに伝わりました。では、私のことはこれから……「キヤーーーーーー!!!」なんだ!？」

突然鳴り響く悲鳴。ツナたちは驚いて辺りを見渡すと、ここから数百メートル離れた村に黒い煙が上がっていた。

「向こうだ！」

「とにかく聞いてみましょう！」

急いで村まで走る四人。しかし四人が着いたときには村の家が焼け、肉が焼ける嫌なにおいを放ち、地面は血の色に染まり、そこには何人も死体の数々。それはもうひどい姿になっていた。

「ひどい・・・」

「おそらくこれは賊のしわざでしょうね・・・」

「大群で小さな村に押し寄せ、金や食料だけでなく女まで奪っていく。なんて最低なやつらなのです！」

すると星が黙って村のなかへ歩を進める。

「星ちゃん？」

「なにをする気ですか？」

ふたりの言葉に不敵な笑みを浮かべる星。「知れたこと。賊をうつ」

「「なっ!?!」」

そして歩き続ける星。しかしそれを稟と風が止めに入る。

「一人じゃ無茶ですよー！」

「死ぬ気ですか!?!」

「この私が賊ごときで後れをとるとでも？　なあに、死にはせん。すぐに片ずけてみせるさ」

振り向き、ツナたちに笑いながらそういつてのける星は、颯爽と一人で賊たちのもとに向かつていった。

「行ってしまいましたねー」

「そうだな」

「（守りたいから守る……やっぱり趙雲さんも同じなんだ……）」

心配そうな顔で星を見送る二人の横で、グツと拳を握るツナ。すると稟がクルツとツナたちの方を向く。

「行きましょう。彼女の想いを無駄にはいけません」

「そうですねー。それではお兄さんも行きま……お兄さん？　どうしたんですか？　おーい」

いくら呼びかけても一向に返事をしないツナ。ツナは自分の中である決心をしていた。

「稟さんたちは先に避難しておいてください。オレは趙雲さんを助けにいきます」

「「綱吉さん（お兄さん）！？」」

その言葉に二人は驚く。

「戯志才さんたちだって趙雲さんをこのまま一人で行かせるのは不安ですよ？だから、オレが加勢に行きます」

「だめだ！ たった三人の賊にも勝てなかったお前が言ったら、星のあしでまといになるだけだ！」

「そうですよー。最悪何も出来ずに死ぬのがおちですよー」

「ア、アハハハハ・・・（このひとたち、さっき知り合ったばっかだよな・・・）」

それにしても散々な言われようである。ツナは苦笑しながらそれに笑顔でこたえる。

「大丈夫です。オレは二人が思っているよりは強いですし、それに言い方しましたよね？ 手の届く範囲で、守りたいから守るんだってだからオレは、・・・」

ポオウ！！

「手の届く趙雲を守るんだ」

「！！！！！！」

これが、後にこの世界を左右する存在である『大空の御遣い』が生まれた瞬間だった。

「はあ！ せい！！」

「グワ！？」

「ガア！！」

「おい！ 何やってんだ！ 相手は一人なんだぞ、困んでやつちまえ！！」

「はあ、はあ、はあ、……………」

賊を甘く見ていた。星はそう思った。いくら雑魚どもの集まった集団だからといっても、これだけ数があれば流石にきつい。いくら槍で突いたり斬つたりしても、一向に数は減らない。むしろ増えてるようにも見えた。疲労していく星は、フと先ほど知り合つたばかりのあの少年のことを思い出す。

「（彼は……実はすごい者なのかもしれん）」

そう思ったのは、さっき星が半ば意地悪で言つたあの質問の答えを聞いた時。『自分の手の届く範囲で皆を救う』。これは星が掲げていた信念そのものだった。

一人の人間が助けられる人間の数などたかが知れている。それを知っているからこそ仲間を作り、協力し、守れる範囲を広めるのだ。

そんなことも気づかずただ大勢で暴力を振り上げる賊は、おろか者だ。一匹オオカミを気取っている者など愚の骨頂。それをあの少年はすっかりと理解して、自分の力量を把握し、可能な範囲を徹底的に守りきる覚悟ができています。星はツナ言葉の聞き目を見たとき、それら全てが彼から伝わってきた。今思い出して考えてみてもやはり同じ結論しか出てこない。

「（フツ、よく考えたら私は出会ってからずっと沢田殿のことを考えていたな。この私にここまで想わせるとは。沢田殿も罪なお人だ。願わくば、一度酒を飲み交わしたいものです）」

だから・・・

「この趙子龍、貴様らなどには負けん！！ハアアアア！」

そして星の攻撃は再開する。愛用の槍を斬り、突き、薙く。斬り、突き、薙く。それでもやはり賊の数は減る様子を見せない。そしてついに疲労が限界に達したのか星は足を捕られ倒れてしまった。

「！！ しまった！」

「『死ねええええー！！！！』」

これを好機だと思ったのか三、四人の賊が一斉に星に切りかかる。星は槍で防ごうとするが今からではもう遅い。賊から振り下ろされた剣はすぐ目の前にあった。

「（あ、私はここで死ぬのか・・・まだ、仕える主君にも会っていないのに・・・まだ、彼と話したかったのに・・・）」

シュン！！ ドカツ！

「ぶべら！？」

「どわっ！？」

「のわっ！？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・え？」

死を覚悟した星。しかしいつまでたつても斬られる痛みは来ない。
おそろおそろ目を開けてみるとそこにいたは・・・

「大丈夫か？ 趙雲。お前を助けにきた」

額に炎を灯し、さっきまでの気弱な雰囲気とはまるで逆の雰囲気を放っている、あの少年だった。

第三席 一時の別れ、来る！（前書き）

かなりいろいろな意見を頂いています！ 感謝感謝。星の口調が安定しません。次出すときはちゃんとしますから今回までは我慢してください。

第三席 一時の別れ、来る！

「大丈夫か？ 趙雲。お前を助けにきた」

最初、星は自分の目の前にいるこの少年が誰だか分からなかった。しかしその少年の後ろ姿をよく見ると趙雲の顔は驚きに染まる。

「なっ、なにをしている沢田殿！ 稟たちと一緒に避難したのではないのか！？ 何故ここにいる！？」

ツナに怒鳴りつける趙雲。だがツナはまったく気にする様子もなく趙雲に言う。

「心配するな。程立たちはとっくに避難しているはずだ。オレはこいつらを引きつけておくから趙雲も早く二人のところに行くんだ」

「な！？ なにを「いいから行け」」

少しキツイ口調でツナはそう言うが、そこは武人のプライドが許さない。星は自分の槍を支えになんとか立ち上がる。

「なにを言っておられるのですか。私はまだまだやれ・・・っつ」

そう言っつて武器を構える星。しかし転んだときに足をくじいてしまい、少し足が腫れていた。それでもなお闘おうとする星にツナは少し笑っつ。

「なっ、何故笑っているのですか！？ / / / /」

「いや、なんでもない。そんなに動きたくないのならそこで見ていてくれ。オレの闘いを・・・」

その瞬間、星の目の前からツナが消えた。いや、消えたわけではない。ただ前方の敵目掛けて進んだだけなのだ。目にも止まらぬ速さで。

「フッ！」

「ぐわっ!?!」

そしてその勢いのまま数人の賊を巻き添えにさせて賊の一人を殴り飛ばした。

「!?!」

「なっ、何だ今は!?!」

「消えたと思っいたらいきなりぶっ飛ばされちまったぞ!?!」

星と同様に賊たちも驚いているようで皆が目を見開いている。

「どうした。お前らの力はこんなものか」

「くっ、構わねえ! 一斉にやつちまえ!?!」

「危ない!?!」

全方位からツナに襲いかかる賊たち。それを見てツナに叫ぶ星だが、

これは杞憂に終わる。ツナは持ち前の超直感を使い、まるで相手の先を読んでいるかのような動きで賊の攻撃を避け、次々に賊たちを倒していく。

「……………すごい……………」

最初のほうは無理をしても自分が手助けに入ろうと思っていた星も今ではツナの動きに見惚れ、

「うぐがっ!」

「だはー!」

「ひっ、ひい! お助けを!」

「お前で、最後だ」

シュ! ドス!

「がっ……………」

最後の一人が倒れるころには、

「ふう、」

シュウウウ……………

「趙雲さん! 怪我はありませんか!」?

トクン……………

「はい。大丈夫です／＼／＼」

趙雲の胸はいままでにならないほど高ぶっていた。

星SIDE

「すごい・・・」

これが私のやっと出した言葉だった。

私はおごりではないが少しは強いと思っていた。そのへんの賊の集団ぐらいなら私1人でも倒せるだろうと。だがそれがいけなかった。現実には想像以上の敵の数に苦戦しているだけだった。斬っても斬っても賊は減らない。それどころか数は増え、自分の体力はどんどん削れていく。まだまだ修行が足りないなと思うと同時に出てきたのは彼の顔。その頼りない顔の裏に隠された大きな覚悟。思えば最近彼のことばかり考えていたなと心の中で笑うと私の愛用している槍を構え直す。

「この趙子龍、貴様らなどには負けん！！ ハアアアア！」

そして走り出し賊を斬っていたその時、足をくじき転んでしまった。

「！！ しまった！」

普段の私なら決してしないであろう失敗。その隙をみて三人の賊が剣を振り上げる。槍で防ごうにももう間に合わない。私はここで死ぬ。そう覚悟した。しかし、

シュン！！ ドカツ！

いつまでたっても痛みは来ない。逆になんだか暖かい感じがする。私はおそろおそろ目を開けてみると、

「大丈夫か？ 趙雲」

そこにはさっきまで頭の中で映っていたあの頼りない顔ではなく、何故か額に炎を灯し、まるで別人のような顔をした。あの少年だった。

それからの彼の動きは常人を遥かに超えていた。普通の人間ではだせないであろう速度で移動し、あの華奢な体のどこにあんな力があるのかというほどの怪力を発揮する。さっきまで自分は強いと思っていた自分が恥ずかしいと思ったぐらいに。私は確信した。彼は本物だ。彼こそ、沢田綱吉こそが、本物の天の御遣いだと。・・・そして、

「趙雲さん！ 怪我はありませんか!？」

「はい、大丈夫です／＼／＼」

私はこの人を好いてしまったんだということ。

SIDE OUT

「そうですか。よかったです！。それじゃあ行きましょう。稟さんたちがまっていますよ」

「ああ、そうだ・・・うっ！」

ツナの言葉にこたえ星は立ち上がるうとするが、まだ腫れが引いていない足を無理に動かせば、当然痛みは走り星は苦痛の表情をする。

「え！？ どうしたんですか！？ うわ！ 腫れてるじゃないですか！ 無理しちゃだめですよ！」

ツナは星の引きつった声に反応し、すぐさま星のもとへもどり、足の腫れ具合をみたあと星に背を向けしゃがみはじめた。

「はい」

「え？」

「だからはい！」

「だからなんなのだ？」

ツナの突然の行動に戸惑う星。

「オレが趙雲さんをおぶっていきますから早く乗って下さい」

ツナのその言葉でやっと理解したのか、趙雲は顔を真っ赤にさせる。

「い、いいい、いや、大丈夫ですぞ。これくらい／＼。なんてことは……っつ、」

「やっぱり大丈夫じゃないじゃないですか。ほら、乗ってください」

「ううううー」。承知した……」

しづしづツナの意見を受け入れ、ツナの背中に体を預ける趙雲。ツナはしっかりと趙雲が自分につかまったことを確認するとヒョイと立ちあがり稟たちの待つ村の方へ歩き出す。しばらくは赤くなつたままの趙雲だったがさすがにやられたままでは性に合わないのかツナをからかい始める。

「沢田殿はいつもこのようにヒョイヒョイと女を背中に乗せるのですか？」

「い、いや、そんなんじゃないですけど……」

「ほづ？　なら何なのでしすか？」

「ちよ、趙雲さん！　む、胸が／＼／＼！」

「ふふ、当たっているのだよ」

「趙雲ちゃん（――――）」

「星だ」

「え？」

突然の話の転換にツナは聞き返す。

「沢田殿は私の命の恩人でしょう？　なら真名を預けるに値する。私のことは星と呼んだされ」

星に真名を認められた。それがよほどうれしかったのか、ツナは最初に会ったときと同じ笑顔で言う。

「ありがとうございます！　オレのことは『ツナ』って呼んでください！」

「！？／／／ん、あ、ああ。分かった／／／。そ・れ・と、その他人行儀のような口調はやめてください。なにか気に食わんです」

「え、でも星さんだって普段はオレと話すときは敬語じゃ・・・「分・か・り・ま・し・た・か？」あ、はい。わかりまし・・・分かったよ。改めて宜しく。星」

「ああ、宜しくおねがいしますぞ。ツナ殿」

そのあと真名で呼び合っているツナたちを稟たち二人が見つけ、稟が鼻血を出し、ツナのあの能力について三人に徹底的に聞かれ、あーだこーだ言っているうちに二人も真名で呼ぶことになったとかならなかったとか・・・。

「次の日」

「さて、私はそろそろここでお別れですな」

「オレも」

星とツナの一言に驚く二人。

「おや？ どうした？」

「いや、だって、いきなりお別れなんて言うから・・・」

すると星はフツと笑い理由を説明する。

「いや、なに、少々路銀が心もなくなっただけ、どこかに仕官でもしようかと」

「そうですか・・・この辺りだと、冀州の袁紹か幽州の公孫贇あたりですか？」

稟の言葉に星はうなづく。

「ああ、だが・・・噂通りなら袁紹殿はあまり好きになれそうにないので公孫贇殿の方へ行こうと思う」

「お兄さんも星ちゃんと一緒に行くのですか？」

「違うよ。オレはまだこの世界のことを何も知らないからいろんなところを回ってこの世の中を見てみたいと思うんだ」

「そうですか。一度に二人もいなくなるとは・・・さみしくなりますね。」

風が若干落ちた声で言う。

「ごめんな」

「すまないな、二人も早く仕えるべき人物に出会えるよう祈っておくよ。そして・・・ツナ殿」

「ん？ 何？ 星」

「あなたが成すべきこと、早く見つければいいですね！」

そう言いながら星はツナに思いっきり抱きついた。

「せ、星！？／＼／＼ いきなり何してんの！？」

「惚れた男に抱きついてはいけませんかな？」

「星！？／＼／＼／＼」

「ブハッ！／＼／＼」

「はい、稟ちゃん、トントンしましょうねー」

「え、えええつと、星？ オレたちはまだ会ったばかりで、今からまた別れるところで・・・えと、その・・・／＼／＼」

しどろもどろするツナ。するとしばらくツナに抱きついていて星が

笑いだす。

「アツハツハツハ！ やはりツナ殿はからかいがいがありますなー」
そしてスツとツナから離れる星。ツナはからかわれたのだと気付くと大きなため息を放つ。

「悪い冗談はやめてくれよ・・・」

「いやーはっはっは！すみません、つい」

悪びれもせずに笑う星。駄目だ、彼女には勝てる気がしない。ツナはそう思った。

「では、いつかまた会いましょう」

「うん。縁があれば」

「またですよ〜星ちゃん、お兄さん」

「また、何処かで」

そして星、稟と風、ツナは別々の方角を向き、それぞれの目的のため歩き出した。

「これは・・・どういこと？」

ツナたちが村を出て行った数時間後、大軍をひきつれて金髪の少女

がやってきた。

「私達より先にたどり着いた軍がいたの？　もしや官軍？・・・そんなわけはない、今のやつらにそこまで骨のある者は存在しない。もしいるなら、賊がこの街を攻めるはずもない」

「華琳さま〜！」

華林と呼ばれたその少女は、思考の海から上がり、自分の名を呼んだ黒髪の女性の方を向く。

「お疲れ様春蘭、それで？」

「はい！住民に聞いたところ、この街に軍は私達以外やってきてはいないということです」

春蘭と呼ばれた女性は華林の質問にこたえる。

「軍がないのに賊を撃退した？　それだけこの街の警備兵が優秀だったって事？」

「いえ、賊が攻めてきた時、兵は混乱していて役に立たなかったそうです」

「・・・それじゃあいったいどうやって・・・」

「華琳様・・・その事についてご報告が」

わけがわからないと華林が頭を抱えている中、春蘭と似ているが髪

の色が水色ですこしクールな雰囲気を放っている女性が華林に話しかける。

「秋蘭・・・それで、報告は？」

「はっ、住民に聞いたところ、この街を救ったのは二人組の男女だそうです」

「・・・なんですか？」

秋蘭の言葉に華林は驚く。

「（たった二人で賊から街を守ったというの？ ありえない・・・）」

「信じられないのも無理がありません。ですが華琳様、聞き込みをした者全てから同じ答えが返ってきたのです。赤い槍を持った女と、額と手に炎を灯した不思議な少年が賊を打ち倒した・・・と」

少数なら笑い飛ばせるが、それだけ多くの人間から聞いたのならそれが真実なのだろう。そう思った華林は腕を組む。

「そう・・・その男女の特徴は？」

「はっ、女の方は青い髪に白い服、少年の方は茶髪のとがった頭におかしな形の指輪。見たこともない服を着ていたそうです」

「女の方はいいとして・・・その男・・・気になるわね」

華林の頭に巷を騒がせている噂よぎる。

「とにかく、実力の方は充分のようだし・・・ぜひとも欲しいわね・
・それだけの武を持つ者なら必ず私の覇道の力になるはず。フフ・
・待っていなさい、必ず探し出してあげる」

物語は始まったばかりだ。

第三席 一時の別れ、来る！（後書き）

最後に華林さん出してみました。次回からはアニメ沿いにしてみます。

ご意見・ご感想まだまだ募集中！

第四席 関羽、来る！（前書き）

アニメ沿いです。言い忘れていましたがたまに時間軸がバラバラになることがあります。その辺はご了承ください。

第四席 関羽、来る！

サ、サ、サ、サ、

桃の花弁が舞う中、一人の少女が道を歩く。その少女はマントをはおり顔はよく見えないが、手には少女の背を越えるほどの槍を持っている。

「桃、か。……そろそろ出てきたらどうだ？」

「へへへへ、気付いてたか」

少女の言葉に出来たのは四、五人ほどの山賊だった。山賊は下品な笑みをしながら少女を囲む。

「ここは俺たちの縄張りでな。通してほしかったら金目の物を置いて行きな」

「まったく、世も末だな」

バサッ

ため息を吐きながら解かれたマントの中から綺麗な長い黒髪が流れ落ちる。

「我が名は関羽。乱世に乗じて民を苦しめる悪党どもめ、これまでの悪行を地獄で詫びたくば、かかってこい！」

そう言って黒髪 of 山賊狩り、関羽は槍を構えた。

「「「「「

そしてツナはその村に一晩世話になり、日のあけるころに酔いつぶれて寝ている村人に気付かれず村長から聞いた一番近い村に向け、静かに村をでていった。

「黒髪の山族狩りか。会ってみたいな」

その願いがすぐに叶うことを知らずに。

「クシユン！！・・・？ 風邪かな？」

一方その黒髪の山族狩り、関羽は山道を歩いていた。

「それにしても、ここ最近やたらと賊が多いな」

少しばかり強い口調で言う。すると山道の物陰から山賊が五人ほど出てきた。

「へへへ、ここは俺たちの縄張りだな。通してほしかったら金目のものを置いていきな」

「はぁー。どこかで聞いたような台詞だが、そんなに死にたくばこの青龍偃月刀の錆びとなるがいい!!」

関羽は槍構え、走り出す。そしてその切っ先が賊の一人に届こうとしたその時、

「うわ!? わわっ、うわわわわー！！！！!!」

「え? きゃあ!?!」

関羽は突然上から降ってきた少年に押しつぶされた。

〈数分前〉

「あつれー、おかしいな。どこで間違えたかな」

ツナは野良犬に追いかけられたり、何も無いところで何度も転んだりなど、久しぶりにダメっぷりを発揮し、今は道に迷っていた。

「まずいなー。昼には村に着くはずだったのにこれだと夜になっちゃっよ」

前の村の村長にもらった地図を見ながらそう言っているうちにツナは開けた高台にでた。取り敢えず辺りを見渡せる所にこれたことに安心するツナだったが、下の方で一人の少女が数人の山賊に囲まれていることに気づく。

「あ! あんなところのも賊が! 助けにいかんきゃ!」

そう思ったツナは急いで下に行く道を探して少女のもとに行こうと

する。だが、

ピシッ！

「・・・・・・・・え？」

ピシシッ・・・ドカーン！

「えー！？」

ツナが立っていたところが自然とは思えないほど綺麗に崩れ、少女たちがいる場所へまっさかさまに落ちていく。しかも落下地点は丁度少女が立っているところ。

「うわ！？ わわっ、うわわわわー！！！」

「え？ きゃあ！」

なんとか直撃は免れようとしたツナだったが、その頑張りもむなしく黒髪の少女と激突した。

「いててて・・・・・・・・ああ！ すみません！ 大丈夫でしたか！？」

頭をさすりながら謝るツナ。下敷きになった少女にはどこにも怪我は見当たらないが、顔をとても赤くしていた。

「あ、ああ、大丈夫だノノノ。だから・・・その・・・早くどいてもらえる嬉しいのだが・・・・・・・・ノノノノ」

「え？」

今現在、ツナはさきほど押し倒してしまった少女、関羽に近くの村で昼飯を御馳走になっていたりところだった。しかもこの村はツナの目的地だったのでさらに好都合。ちなみに関羽を取り囲んでいたあの賊はツナと一緒に落ちてきた岩でのびていた。

「それにしても沢田殿が最近噂になっている大空の御遣いか・・・あまり強そうには見えんのだがな」

「あははは・・・よく言われます・・・それに引き換え関羽さんはオレと違って噂通りの美人ですね」

「さっ、沢田殿！？／／／／　あまりそういうのを真正面から言われると・・・その・・・／／／／」

「あれ？　どうかしたんですか？」

「（くっ、こいつ立ちの悪い鈍感か）」

ツナは目の前でいきなり顔を赤くして固まってしまった関羽を見ながら頭の上に疑問符を浮かべるが、フと自分のもといいた世界の関羽のことを思い出す。

「（やっぱりあの関羽も女の人か・・・。本当になんなんだろうこの世界は。しまいには曹操も女だったりして・・・）」

「あの・・・沢田殿？　あまりジロジロみられると私も恥ずかしいのだが・・・」

「え？　あ、ああすみません。ところで関羽さんはなんで旅をしているんですか？」

ツナの質問に関羽はそれはな、と答える。

「世の中を変えるためにだ」

「世の中を？」

「正確には、どうすれば世の中を変えられるのかを探す旅。といったところなんだがな」

「凄いいじゃないですか。立派だとオレは思いますよ」

「ふふ、ならば沢田殿は何故旅を？ どこかの軍に仕官するれば、すぐに通ると思うが」

ええ！ オレですか！？ ツナはまさか聞き返されるとは思ってもなかったのかおかしな声で言うが、すぐに照れくさそうな顔で答える。

「オレは関羽さんみたいに立派な理由じゃないですけど、オレのやるべきことを知るために旅をしているんです」

「やるべきこと？」

今度は関羽が聞き返す。

「はい。オレ、いきなりこんな世界に連れてこられて、最初は混乱したけど、なんかすんなり受け止められるようになって・・・」

これはリボンとの出会いが原因だろう。マフィアの十代目ボス。

ツナにはまったく縁のないと思っていた世界だった。しかしリボンと会ってから自分の世界が一気に変わり、獄寺に山本、笹川良平、京子、ハル、ランボ、イーピン、他にもたくさん仲間が出来た。だからツナはこの世界に連れてこられた時に思った。また新しい仲間が出来る。現にもう別れてしまったが星に風に稟。三人の少女が自分に神聖なものであるらしい真名を預けてくれたのだ。

「それでオレ、思ったんです。オレがこの世界に呼ばれたのは、何か意味があるんじゃないかって。それを探すためにオレは旅をしているんです」

「ほう」

関羽は一瞬感心したような顔をしたが、その顔はほほ笑みに変わる。

「いいのではないか？ 人の数ほど道はある。沢田殿の道も、また見事なものだよ」

「そ、そうですね？」

関羽はうむと一言言つと席を立ちあがる。

「さて、私はこの女将に一晩泊らせてもらえるかどうか聞くんもりなのだが、沢田殿も一緒にどうだ？」

「え？ いいんですか？」

「なに、旅は道ずれ世はなんとやらだ。それに、少し沢田殿に興味があったからな」

「ありがとうございます。関羽さん」

ツナは精いっぱい笑顔で関羽にお礼を言つと、関羽の顔が真っ赤になった。

「え！？ どうしたんですか関羽さん！ 顔が真っ赤ですよ!？」

「い、いや、大丈夫だ。心配ない／＼／＼。 (あの笑顔は反則だろ
！！／＼／＼／＼)」

「あ、あんまり無理しないでくださいね・・・」

「・・・分かった・・・」

そしてそのあと二人は女将に小屋を使つていいと許可を得て、一つしかなかった小屋に二人で寝た。

女将に二人を夫婦だと間違えられ、関羽の頭から湯気が出たのは余談だ。

第五席 兄妹の契り、来る！（前書き）

会話文が多くて読みにくいかもしれません。

第五席 兄妹の契り、来る！

「はああああ！！！」

ズババババ！ パラン。

「すごいですね。関羽さん。でも、なんでその切り方なんですか？」

ツナは関羽の掛け声とともに綺麗に切られた大根を見ながら言う。

「ちゃんとした料理は、あんまりやったことがなくてな……。つい・
・／／」

ツナたちは今、昨晚世話になった料亭の女将さんの手伝いをしていた。しかしこの女将、非常に人使いが荒い。昨日も寝る前に散々こき使われてヘトヘトの状態で寝たのだ。

「でも、ほとんど失敗続きで女将に呆れられたお主が言うことではなかるう？」

「う、あはははは……」

「お、やってるねー」

噂をすれば影。女将さんがツナたちに話しかける。

「「げ、女将」」

「む、何だいその目は。まあいいさ。それが終わったら巻き割りに

店の掃除、ついでに納屋の片づけも頼もうか。あと、山に行つて芝を刈つてきておくれ。急いでだよ」

「いや、あの……ホントにちょっと人使いが荒くないか？……」

「はあー。巻き割りに掃除に芝刈り。あとは……」

「洗濯と店の手伝いがありましたね……」

「これでは体がもたない……」

ツナたちは背中に芝を背負い、愚痴を言いながら道を歩いていた。

「あれ？」

「ん？ どうしたのだ？ 沢田殿？」

するとツナが人だかりを見つけた。興味本位で二人は近づくと中から中年の男性の声が聞こえた。

「いいですか！ 相手は子供といえど手がつけられん暴れ者。油断は禁物ですよ！」

「すみません。何かあつたんですか？」

ツナは少し気になり近くの村人に話しかける。

「なんでも、今からお役人に鈴々を捕まえてもらつてすって」

「「鈴々？」」

二人は効きなれぬ言葉に首をかしげる。

「この村の近くに住む悪ガキどもの大将さ。庄屋様、この前庄屋様の壁にあつた大きな庄屋様の顔の落書きが相当頭にきたらしくて・・・」

「役人につて、子供相手に大げさな。親はどうしたのですか？　このような騒ぎになって・・・」

関羽の言葉に村人顔は暗くなる。

「あの子、親はいないんだよ。小さい頃押し入ってきた山賊に両親を・・・そのあと村の近くの山小屋に住んでいた母方のじいさんに引き取られてきたんだけど、そのじいさんも亡くなって、今は一人さ」

「そうだったのですか・・・」

「でも今の庄屋様には関係ないだろうね。捕まったら殺されはしないと思つけど何をされるか」

「関羽さん」

「分かつている」

村人の話を聞いた二人は、庄屋の家の門まで行き、そこで鈴々の恐ろしさを熱く語っている庄屋に話しかける。

「庄屋殿、お話の途中で申し訳ないが・・・」

「ん？ 何だお前は？」

「私は旅の武芸者で、名は関羽。あだ名を雲長と申すもの。聞くところによると、鈴々なるものは大人でも手を焼く暴れ者とか。万が一不覚をとって役人な方々がけがをしてもつまらぬでしょう」

「ここはひとつ、オレたちに任せてもらえませんか？」

「あんたらが？ 確かに女の方は物騒なものを持つてはいるが・・・ホントに強いのか？ 特に男の方」

怪しいものを見るような目で関羽立ちを見る庄屋。その中で、完全に弱い者とみられているツナは苦笑いをしている。

「これは、ちょっと。もちろん腕にはいささか覚えがあります」

「オレもです」

「いくら暴れ者とは言え、所詮は子供。本物の山族に比べれば・・・」

すると庄屋の隣にいた兵の頭らしき人がハツとした顔になる。

「あつ！　もしかして貴様が、最近噂の黒髪の黒髪の山賊狩りでは・・・？」

その言葉に庄屋もハツする。

「何！？　あんたがあなの！？」

「いや、自分からそう称しているわけではないが」

顔を赤らめて言う関羽。しかし、

「「「「えーーーーー！」「」「」

「黒髪が綺麗な絶世の美女と聞いておつたが・・・」

「噂うちゅうのもんは当てにならない・・・」

「え、えーつと・・・それはどういう・・・」

「か、関羽さん関羽さん！　おさえておさえて！」

さっきの顔とは一変、今にも青龍偃月刀を振り回しそつな関羽をなんとかツナがなだめ、二人は鈴々がすむ近くの山小屋に向かった。

「まったく。心で思っても口には出してはいけないものがあるだ

ろつ。そう思わぬか？ 沢田殿

「あはははは……（オレ、気付いてすらもらえなかったんですけど……）」

そう思いながら歩いていくツナだったが、しばらく歩くと先ほど庄屋が言っていた大きな一本杉が見えてくる。

「これが一本杉か」

「この道を左に行けば、あとは道なりって言っていましたね」

「ふん、所詮は子供、とっ捕まえて庄屋の鼻を明かしてやるわ!!」

そういつて関羽が息巻いて左の道を歩いて行った数分後……

「コ~~~~ラ~~~~!!!!」

「ブースデー年増!! お前なんか親ビンにやられちゃえー

ー!!」

「ちょ、ちょっとお前らまでって!!」

「うるせー普通ー!!」

「ぶつー」

「ぶつ、普通っていうなー!!」

関羽とツナは絶賛子供たちと追いかけてこ中であつた。

「むっ、無理。もう疲れたよー」

「何を弱気なことを言ってるんだ沢田殿！ やつとガキどもを家へ帰したというのに！」

数時間後、ツナたちはやっと鈴々山賊団の子供たちをそれぞれの家に帰らせ、鈴々のいる山小屋へ行こうとしていた。

「ほら！ 行くぞ！」

「うう、はい（なんか関羽さん、バジルくんみたいだ・・・）」

そして数分歩いたところ、ついに二人は目的地である山小屋へたどりついた。すると山小屋の方に人影が見える。ツナが目を凝らしてよく見ると、その人影は赤い色をした髪にトラのような髪飾り。そして関羽とは違った形をした槍をもった少女であった。

「お主が鈴々だな」

「鈴々は真名なのだ！ 真名は親しい者同士が呼び合う名だからお前に呼ばれる筋合いはないのだ！」

「なるほど。では改めて聞こう。お主、名はなんという」

「我が名は張飛！ 字名は益徳！ 寝た子も泣き出す鈴々山賊団の親ビンなのだ！」

そう言いながら手に持っていた槍を振り回す張飛。あれ？ 何か違うなーと思ったツナだが、取り合えずスルーしておいた。

「お主の手下はみんな村に追い返したぞ」

「鈴々の友達に何をしたのだ!？」

崖をかけ降りながらそう言う張飛。

「なに。ちよつとしたお仕置きをな……」

「おによれ！。仲間の敵！ 十倍返しなのだー!!」

「フツ、来い！ 沢田殿、ここは私に任せてもらえぬか！」

「はあく、いいですよ。オレはそこで休んでいますから……」

「はああああー!!」

「でりゃあああー!!」

そして二人の槍が交わった。

「でりゃあああああ！！！」

「はあああああああ！！！」

ガキン！ ガキン！

突く、斬り、薙く。鈴々の凄まじい攻撃に関羽はただ防いでいるだけだった。

「（くつ、重い！ 力押しでは無理か！）」

そう関羽は思うと、防ぐより避ける戦法で戦う。すると今度は攻撃が出来た。

「なかなかしぶといのだ！！！」

「そつちこそな！」

「でもまだまだ鈴々の本気はこれからなのだ！」

「それは私も同じだ！」

そして二人の戦いは夜中まで続いた。

「はあ、はあ、はあ、はあ、」

「はあ、はあ、はあ、はあ、．．．惜しいな」

「はあ!? 何がなのだ!？」

「これほどの強さを持ちながらやっていることは山賊ごっこか．．．」

「余計なお世話なのだ!」

「張飛よ、お主幼いころに両親を殺されたそうだな」

関羽の言葉に張飛は一瞬ビクツとなる。

「そ、それがどうしたのだ!？」

「私も幼いころに家族を失った」

「!?!」

反応したのは張飛だけではなくツナもだった。

「村が戦に巻き込まれ、父も母も、そして兄者も．．．私は誓ったのだ。こんな悲しみは繰り返したくない。二度とこんなことが起

きない世を目指そうと」

「そ、それが鈴々と何の関係があるのだ!?!」

「お主は変えいと思わぬか!? 戦に巻き込まれ、賊に襲われ、罪のない人々が気づけられていく、この世の中を!」

「うううう・・・うわあああ!?!」

すると鈴々は関羽に槍を叩きつけた。

「そんなの! そんなの分からないのだ! ただ、ただ! 鈴々はずっと、ずっと寂しくて!」

「うっ、くっ、」

バシバシと叩きつける張飛。しかしそれを関羽はじっと耐えている。

「でも、でも、どうしたらいか分かんなくて! それで! それで
――!」

「あっ!」

ついに弾き飛ばされてしまった関羽の青龍偃月刀。それに気付かず感情が高ぶってしまった張飛はもう一度槍を振う。そして槍が関羽にあたるうとした、その時、

パシッ!

「ここまでだ」

「「!!」」

張飛の槍を掴んだのは死ぬ気の炎を灯したツナだった。

シユウウウ・・・

「泣きたいときは泣いてもいいんだよ。胸くらいならオレが貸してやるからさ」

笑顔で言うツナ。するとだんだんと張飛の目に涙がたまる。

「う・・・うう・・・うわあああああん!!!!」

ついに我慢しきれなくなったのか張飛はツナに抱きつき大声で泣いた。ツナは張飛が泣きやむまですっと頭をなで続けていた。

「沢田殿・・・あなたは一体?・・・」

カポーン

『あ! ーら張飛! 暴れるんじゃない!』

『うー、髪の毛くらい自分で洗えるのだ!』

『いいだろたまには他の人に洗ってもらうのも!』

『あ! きゃは、きゃはははは! やめるのだー。くっ、くすぐったいのだー／／／』

「・・・はあく、妙なことになったな」

一足先に風呂を堪能し、張飛の寝まきを着ながら関羽は風呂場から聞こえるツナと張飛の声を聞いていた。

「好きにしるって、それはどついう・・・」

数時間前、関羽は困っていた。なぜなら一通り落ち着いた張飛はツナの胸から抜け出し、いきなりふくれっ面で座り込み好きにしると言ってきたからだ。

「勝負の途中で泣いちゃったからさっきのは鈴々の負けなのだ。だから、勝った方は負けた方を好きにしているのだ」

「・・・って、言われてもなー。オレたちは張飛が庄屋さんのとこや村の人たちに謝って、今までの行いを反省してくれればいいんだよ。そうしてくれるか?」

「・・・うん」

張飛はまだなにか納得できていない様子だが取り敢えず了解はしてくれた。

「謝る時は私たちも付き添ってあげるから、明朝に村の入り口で待ち合わせをしよう。では、帰るぞ沢田殿」

「あ、はい」

そして二人は元来た道を振り返る。すると張飛が慌てたように口を開いた。

「よ、夜の山道は危ないのだ。だ、だから今晚は鈴々の家に泊まって行けばいいのだ！」

「私は旅に出て長い。これくらいは慣れている。じゃ」

そしてまた歩き出す関羽。それを見て一気にショボンとなる張飛。やはり少し罪悪感があるのか張飛の後ろ姿とツナの『エー……』という目で見えて、諦める。

「気が変わった！ 一晩厄介になってもよいか？」

すると張飛は、

「はあああ／＼／＼（ ）（ ）」

一気にテンションを変えた。

「はにゃ。やっぱり鈴々のじゃちっさかったのだ」

「いや、十分だ」

「いや、オレからしたらアウトなんですけど・・・／＼／」

ツナは鈴々の小さい寝まきを着て胸元がとても見える関羽のその姿に赤面する。関羽も、流石に開けすぎかと思ったのか手で胸を隠す。

「あ、あんまり見ないでくれ・・・／＼／」

「い、い、い・・・ごめんなさい！／＼／」

「？ 何をしてるのだ？ 二人とも？ 早く寝るのだ」

「あ、ああ。すまぬな。寝どこまで貸してもらって」

「いいのだ。勝負に負けたのだから一晩一緒に寝るぐらいしようがないのだ」

「なんか、誤解を招きそうな表現だね・・・」

苦笑いするツナ。

「それに、こんな風に誰かと一緒に寝るなんてすごく久しぶりで・・・全然、全然嫌じゃなくて・・・その・・・なんか、母様と父様

が一緒みたいで……」

「ば、馬鹿言え！ 私はお主のような娘のいる年ではない！ 精々姉とあったところだ！」

顔を赤くさせて言う関羽。しかし張飛は違つところに食いつく。

「姉だったら、お姉ちゃんだったらいいのか!？」

「ん？ んん、まあそれならいいが……」

「だったら、今日から関羽は鈴々のお姉ちゃんなのだ！」

そう言つて関羽に抱きつく張飛。

「ちょ、張飛！」

「ははは、ならオレは張飛のお兄ちゃんだ」

「沢田殿!？」

「そうなのだ！ 綱吉も鈴々のお兄ちゃんなのだ！」

「はあく。分かつた分かつた。お主の姉になってやるつ。なら、お主も世の中を変えるたびに出るか？」

「当然なのだ！ 一緒に行くのだ！ これでもう寂しく……ない……の……だ……」

「張飛？」

「スー、スー、スー、スー……」

「フツ、やれやれ。寝てしまったか……。私たちも寝るか」

「関羽さん」

「ん？ どうした？」

関羽は張飛が寝たのを確認し、自分も布団の中に入ろうとするがツナに呼びとめられる。

「……泣きたかったら、泣いてもいいんですからね」

「!?!」

「じゃあ、おやすみなさい」

「ああ……おやすみ……」

「良かったな。張飛。庄屋殿も村人も鈴々山賊団も、快く見送ってくれて」

「うんなのだ！」

「本当についてくるんですか？」

「うむ。特に行先はないしな。それに前言っただろう。お主に興味がわいたと」

「鈴々はお兄ちゃんたちがどこに行ってもついて行くのだ！」

「そういえば沢田殿、そろそろその敬語をやめてくれぬか？」

「え？　なんでですか？」

「これから一緒に旅をするのだし。その・・・なんだ・・・敬語ってなんか・・・距離があるみたいで・・・／＼／」

「？　別にいいですけど・・・いいよ。これからよろしく！」

「あ、ああ！／＼／／」

「お兄ちゃんは鈍感なのだ！」

「ん？　何が？」

「別にーなのだ！」

「？　っていうか、オレも行くあてはないよ？」

「「え？」」

関羽、張飛と兄妹の契りを交わしたツナ。これからどのようなことが起こるのかは、……神のみぞ知る

第六席 冀州一武闘会、来る！（前書き）

PV20、000、ユニーク5、000突破！
まだまだですが、
これからも宜しくお願いします！

第六席 冀州一武闘会、来る！

「むー……」

「どうしたの？ 張飛？」

「おなかでも痛いのか？」

さきほどやつと山道を出て、一本道を通っている三人。特に行くあてもない三人は、取り敢えず村から一番近い有力者であるという理由で袁紹の冀州に向かっていた。

「おかしいのだ!!」

「おかしいって、何のこと？ 張飛？」

「そこなのだ！」

ビシツと人差し指をツナに突きつける張飛。

「はあ？ そこ？」

「関羽と綱吉は鈴々と兄妹の契りを結んだのに、どうして鈴々のことを『鈴々』って真名で呼んでくれないのだ？ 親しい者同士は真名で呼び合うのが普通なのにおかしいのだ！」

「ああ、確かに」

「オレ、よく考えるとまだ関羽の真名も知らなかったな」

冀州についたツナたち三人は、今晚の宿と路銀を稼ぐ仕事を探していた。

「まさかツナ兄いがあの大空の御遣いだとは思わなかったのだー」

「ねえ愛紗、オレってそんなに弱そう？」

「そう言われたくなければ強いところを一回でも強いところを私たちに見せたらどうだ？」

「あはははは・・・」

するとツナたちの前から馬に乗った黒髪と金髪の女性二人組が見えた。二人の服装を見るとどうやら何処かの武将のようだ。鈴々はその二人のうちの金髪の方を指さして言った。

「うわぁ、あの人頭がすっごいクルクルなのだー」

「わっ！　鈴々ー！！」

「しっ、失礼した！　この者は髪のことを言ったのであって、決して頭の中身がどうかではなく・・・」

「・・・」

じっと愛紗とツナを見つめる金髪の少女。二人はもう苦笑いをする

しかない。そしてやっと少女が口を開く。

「ふん。子供のたわごと、咎めるつもりはないわ」

「（オレから見るとあなたも子供なんですけど・・・）」

そう思いながらも取り敢えず許してもらえたので愛紗とツナは安堵のため息を吐く。

「髪と言えば、あなたもなかなか美しい髪を持っているわね」

「え？ ああ、いやぁこれは他人に褒められるほどのものでは・・・」

髪をほめられて少し照れくさいのか愛紗は顔を赤くする。

「あなたともっと話してみたいけど、今は野暮用があって残念ね。我が名は曹操。縁があつたらまたいずれ」

そう言つて金髪の少女、曹操は隣の黒髪の女性と一緒に去つていった。

「ふう〜。こら鈴々！ ダメじゃないか失礼なこと言つて！」

「鈴々は本当のことを言つただけなのだ！」

「まあまあ。ほら、早く仕事とかが見つけないと。行くよ。愛紗、鈴々」

「「はい（なのだ）」」

そして三人もその場を後にした。

「どっと思っ？ 春蘭？」

「どっ、と言っど？」

ツナたちが去った数分度、三人の後ろ姿を見ながら曹操は春蘭、夏侯惇に話しかけた。

「さっきの者たちよ。あの黒髪の女、多分黒髪の山賊狩りね」

「あの噂の！？」

「そう。でも、もっと気になるのはその隣にいた男よ」

「？」

夏侯惇は曹操の言っていることを理解できず頭にハテナマークを出す。

「あの男、一見弱そうだけど底知れぬ何かを感じたわ。最近噂の御遣いの特徴にも少し当てはまるし……」

「あのものが大空の御遣いだと？」

夏侯惇の言葉に曹操は微笑して首を横に振った。

「まさか。あくまでも私の推測よ。でも、もし本当にそうだとしたら……ふふっ、面白くなってきたわね」

そう言つて曹操はこの冀州に逃げてきた賊を倒すため自分の陣に戻つて行つた。

「ん？」

「どうしたの？ 愛紗？」

仕事を探して数十分。なかなかいい仕事が見つからないツナたちだったがフと愛紗が何かを見つける。それはかなりの人ばかりだった。三人は人だかりの中に入りその中心を見る。

「えっと……何が書いてあるのか分からない……」

「鈴々もなのだ……」

「ふむ、『冀州一武闘会。本日開催。飛び入り歓迎。優勝者には賞金と豪華副賞あり』と書いてあるな。丁度いい。今日の稼ぎはこれ

にするか」

「鈴々が優勝するのだー！」

「え！？ オレも出るの！？」

当然だ。愛紗のサラツと言いつとエントリーのため受付に向かつて行った。

「はあく……仕方ないか。宿代とかもあるし……」

「お前らも大会に参加するのか？」

そうツナと鈴々に話し掛けたのは茶髪でポニーテールの鈴々立ちと同じく槍をもった女性であった。

「そうなのだ！ この大会で優勝して福商ご飯をたくさん食べるのだ！」

「おい！ まだ福商がご飯だって決まったわけじゃないだろ！」

「ははっ！ 面白いなお前ら。でも、優勝は無理かなー？」

「え？ 何ですか？」

「なんてっ たって優勝するのは、このあたしだからさー！」

「なっ、なんなのだ！？ それ！？」

これで三回目の死ぬ気化だった。

愛紗SIDE

私は今この冀州一舞闘会に参加している。理由は今日の宿などの路金を稼ぐためもあるが、なによりツナ殿の実力が知りたかった。あの時、鈴々が私に槍を振り下ろしたときに彼が見せたあの姿。確かに大空の御遣いの噂と同じで、額に橙色の炎が灯っていた。しかし私が驚いたのはそこではない。私でさえも重いと感じた鈴々の槍を、彼はいとも簡単に、しかも片手で受け止めたのだ。あの優しげな顔のどこにそんな力があるのかと私は驚きを隠せなかった。そして今、彼は幸か不幸か最初の対戦相手の鈴々を前に、あの時と同じ橙色の炎を額に灯し、雰囲気は鋭いものになり、両手に赤いくて敵つい手袋のようなものが現れた。

「ツナ殿、貴殿の力、見極めさせてもう」

そして試合開始の銅鑼が鳴り、まず最初に鈴々が動き出した。

「なんだかよくわかんないけど、先手必勝なのだ！」

槍を構え、鋭い突きの連続攻撃をツナ殿に浴びせるが、ツナ殿は攻撃する場所がまるで分かっているかのように全て避け続ける。

「どうした。こんなものか鈴々？」

「ふんにゅー、てりいやー!!」

横に槍を振る鈴々。それを跳んで避け一旦距離をとるツナ殿。だが鈴々は休む暇を与えてはくれないようだ。

「うりやりやりやりやー!!」

「おーっと沢田選手！ 張飛選手の攻撃に手が出せないかー!？」

何を言っている。手が出せないんじゃない、出さないんだ。そう思っているがツナ殿はどんどん試合場の隅に追い込まれていく。本当に手が出せないのか？ 一瞬だけそう思ったがあいつの顔からするとそうではないように感じる。そしてついに一步も動けないまでに追い込まれてしまった。

「ぬっふっふ……追い詰めたのだー」

「……」

無言のツナ殿。やはり何か企んでいる。

「ちよりやー!!」

そして鈴々は渾身の突きをツナ殿に放つ。終わった。会場の皆がそう思ったが、突きがツナ殿に届くその瞬間、ツナ殿が消えた。

「えー!!」

「どっ、何処に言ったのだ!？」

「こっちだ」

トンッ

「え？ わわっ！ あわわわわっ！」

ドテン！

驚いた。ツナ殿は一瞬で鈴々の背後に廻り、鈴々の背中を押して試合場から落としたのだ。周りの観客も「え？」とか「なにがったの？」とか言っている。当然だ。私でさえかろうじてツナ殿が何をしたのかが見れたのだ。普通の人間ではまず見えまい。やはり御遣いの名は伊達ではないのだなと私は思った。

「おい」

「え？ あ！ はい！ 勝者、沢田選手！」

ワァァァー！！！！

「ツナ殿」

「ん？ どうしたの？ 愛紗？」

試合が終わってツナ殿が帰ってきたときに私はツナ殿に話しかけた。やはり先ほどの雰囲気ではなくいつもの雰囲気だった。

「なに、どうしてあのような廻りくどいようなことをして勝つたのだろうと思っただけ。ツナ殿のあの実力ではすぐに勝つてたであろう」と、私が質問するとツナ殿は照れくさそうに頭を掻いた。

「えっと、オレあんまり仲間に怪我とかそういうのはして欲しくないんだ。だからどうしようかなって戦ってる途中で考えた結果があれだったんだ」

「なっ！ あの戦いの中で考え事をしていたのか！？」

「え！？ なんかダメだった!？」

あわわと慌てるツナ殿。やはり雰囲気は変わってもツナ殿はツナ殿なのだ。私はすこし安心した。

「いや、心配ない。では私も行ってくる」

「うん。いってらっしゃい」

お前は私の主婦か。そう思いながら私は試合場に向かった。

「ん？ 何を言っているんだ私は！／＼／＼／＼」

SIDEOUT

そのあとの愛紗の試合は愛紗の圧勝で、ツナと愛紗は順調に勝ち進んでいった。そしてツナとあの時のポニーテールの女性、馬超との試合。

「フッ！」

「うわっ！ つっ！。まいった。あたしの負けだよ」

シュウウウウ・・・

「ありがとうございました。馬超さん」

「!?!?!? / / / / / ン、あ、ああ / / / / /」

「さあ！ なぜ馬超選手が赤くなっているかは知りませんが、準決勝勝者は沢田選手!!！」

ワアアアアア~~~~!!！」

「凄いのだ！ ツナ兄いに愛紗。もう決勝戦なのだ！」

「ああ、これでどっちが勝っても賞金はオレたちのものだ」

「.....」

喜んでいる二人だが、何故か愛紗は頬を膨らませて不機嫌そうだ。

「ん？ 愛紗どうしたの？ なんかすっごい不機嫌そうだけど・・・」

「

「なんでもない。さあ、行くぞ。ツナ殿」

「え？ う、うん・・・」

そして二人は決勝戦の試合場へ向かった。

「さあこの冀州一武闘会もついに決勝戦！　ここまで数多の猛者を倒してきたのはこの二人！　美しい髪に見惚れている間に屍に！　関羽選手！　対するは、それは属に言う二重人格？　沢田選手！　今大会最強を決める戦いも、ついに決着！　注目の決勝戦は、次回に続く！！！」

第六席 冀州一武闘会、来る！（後書き）

ツナです！ さっきなんで愛紗怒ってたんだろ？ さて、次回の
真・恋姫？無双 〱大空を司る少年〱は、

・ツナ対愛紗、勝つのはどっち！？

です。お前ら、死ぬ気で見ろよ。

第七席 愛紗VSツナ、来る！（前書き）

すみません！ 前回予告していたよりもはるかに進んでいません。
なので前回の予告をすこし訂正させてもらいました。ホントにすみ
ません。

第七席 愛紗VSツナ、来る！

「さあ！ ついにやってきた冀州一武闘会決勝戦！ 優勝の栄冠を手にするのは、この二人の内のどちらなのか！？」

ワァァァァァァァァー！！！！

もう日が沈みかけている頃なのにまったく元気が衰えない進行役と観客。皆の目は試合場の上にいる槍を構えた少女と、額に炎を灯した少年に釘付けだった。

「数多の猛者をなぎ倒し、この決勝戦の地にたどりついたのはこの二人！ 黒髪をなびかせながら槍を振うその姿はまさに舞踊！ 関羽選手！ 対するはもうそれは属に言う二重人格では！？ 沢田選手！ 互いの誇りを賭け、戦っていただきましょう！」

「やっとだな。ツナ殿。私は一度貴殿と戦ってみたかったのだ」

「オレもだ、愛紗。それじゃあ……いくぞ！！」

ドワァーン！！

「フッ！」

「はあ！！」

銅鑼の音と同時に二人は先制攻撃に凶る。しかしこれは互いの攻撃によって相殺された。

「クツ、はっ！」

ツナはすぐさま愛紗に回し蹴りを繰り出すが、愛紗はそれを槍で防ぐ。ツナの攻撃を防いだ瞬間、愛紗はツナの足を支点にし、槍をツナに叩きつける。ツナはスレスレの位置でしゃがみ、バックステップで一旦距離を置く。だがその距離は愛紗によってすぐに縮められツナは愛紗の突きを反射で避けた。

「まだだ！」

斬りと薙くを時折絡ませながら放たれる愛紗の連続の突き。ツナは今度は冷静に張飛のときと同じように超直感を使い避けていく。そしてしばらく避けた後、愛紗の槍を掴みこちらに引き寄せ、拳を突き出した。

「（この体制じゃ避けきれない！）」

そう思ったツナだったが、次の瞬間ツナの顔は驚きの表情に変わる。なぜなら愛紗はツナの拳を引き寄せられた勢いを利用して宙返りで避け、同時にツナの背後を取ったのだ。

「しまっ・・・！」

「はああー!!」

横に振られる愛紗の槍。愛紗と観客は決まったと思った。しかし、

ガキーーーーーン!!

ズザザザーーーー・・・

次々に槍に響く衝撃。かろうじてツナの姿が見える愛紗は防ぐことしかできなかった。

「おーっここで急展開！ 沢田選手の姿が消え、関羽選手が突然よろめきだしたぞー！？」

騒ぎだす進行役。少し静かにしてくれと愛紗は思うが、ツナの攻撃は強さを増すばかりだ。

「くっ、どうしたら・・・」

「どうする？ このままじゃ負けるぞ？」

「何か・・・何かツナ殿に勝つ方法は・・・ん？ 確かあの時・・・」

ツナの攻撃を防いでいる中、愛紗はツナ対張飛の試合のあとのツナにした質問を思い出した。

「どうしてあのような廻りくどいようなことをして勝ったのだ？」

「えっと・・・オレさ、あんまり・・・」

「(なるほど。だから今も・・・)」

ニヤリ、と愛紗は不敵な笑みを浮かべると、なんと防御の姿勢をやめたのだ。その姿に観客たちは呆気にとられている。

「ど、どうしたんだ関羽選手！ 沢田選手の怒涛の攻撃を前につい

に諦めたのかー!？」

進行役の言葉と同じ思いを観客たちは抱く。しかしその一秒もしない後、愛紗以外のこの場にいた全員が驚きの顔になる。

「くっ……」

「やっと出てきたな。ツナ殿……」

なんと今まで目にもとまらぬ速さで愛紗に攻撃していたツナが、拳を構えた状態で愛紗の目の前に現れたのだ。ツナは今まで散々していたパンチを今になって出来ない様子でいる。

「隙あり!！」

そしてその隙をついて愛紗はツナに槍を振った。今度こそ決まった。愛紗と観客はツナの体にのめりこむ槍を見てそう思った。だがやはり勝負とは最後まで分からないものである。愛紗の槍はそのままツナの体を突きぬけた。

「悪いな」

ストン

「な!?!……残……像……」

愛紗はぼやけて行く視界の中、槍を打ち込んだはずのツナの姿が消えて行くのを見たあと意識が闇に落ちた。

「あいたたた・・・あ、ああ。大丈夫だ。それより・・・ここは？」

「ここは料亭だよ。鈴々と鈴々の友達・・・馬超っていうんだけど。あの二人は先に隣の部屋で夕ご飯を食べてるよ」

「ああ、あの大会にいた・・・」

ツナ殿に頬を染めた女だな。そう言おうとした愛紗だったがこれでは私とその馬超という女に嫉妬しているみたいではないかと思い、のど元まで出かかっていたその言葉を飲み込んだ。それより今は確かめたいことがある。

「それじゃあ、オレたちも早く食べに・・・ツナ殿」え？ どうしたの？」

「なぜあの時手加減などしたのだ？」

「・・・え？」

しばらくの沈黙。ツナは愛紗が怒っているのだとすぐに分かった。言い逃れは十分に出来る。しかしこの少女には通用しないだろう。ツナは潔く認めることにした。

「ごめん・・・愛紗の言う通りオレは愛紗の戦いで手加減をした・・・でもオレは仲間に怪我をさせたくないだけで！だから手加減したというのか！」　　「！！！」

ツナを睨む愛紗。

「私は武人だ。武人が戦うときは常に全力。それを知っていて貴様は
「オレは!!!!!!」」

「オレは・・・武人じゃない・・・」

愛紗をにらみ返すツナ。二人の周りにはしばらく外の活気ある声だけが聞こえた。そしてその沈黙を破ったのはツナだった。

「オレは、ホントに仲間を傷つけないからこの力を得たんだ。確かに全力で戦っていた愛紗相手に手加減してたのは謝る。でもこれだけは、譲れない」

そしてまたもや沈黙。しかしこの沈黙はすぐに終わり、愛紗が大きなたため息をついた。

「はあく。ツナ殿も強情だな。・・・すまない。私は少し頭に血が上っていたようだ」

長椅子で寝たままの状態で頭を下げる愛紗。ツナはあわわと慌てる。

「あ、頭をあげてよ愛紗！ オレも手加減をしたのも悪かったしさ
!!!」

それでもなお頭を上げない愛紗のさらに慌てるツナ。すると愛紗が盛大に笑った。

「あはははは！ やはりツナ殿はからかいがある!」

「や、やめてよ・・・」

どこかで聞いたことがあるセリフである。ツナはそう思うと愛紗が笑いを抑えて喋りだした。

「だがしかし、ツナ殿に手加減されるとは、私もまだまだだな」

「えっと・・・それはどういう・・・」

すると愛紗はツナに向けて指をさす。

「今回のことは許そう。だが、今度私がツナ殿に勝負を挑む時は私がツナ殿に勝てると思った時だ。その時はしっかりと全力で戦ってもらおうぞ?」

「うん。分かった。その時は全力で相手をさせてもらうよ」

そして笑いあう二人。しばらくすると愛紗が長椅子から立ちあがり出口の方へ向かう。

「さて、腹もすいたし、私たちも鈴々たちのもとへ行くとするか」

「そうだね」

ツナは腰掛けていた椅子から立ち上がり愛紗とともに鈴々と馬超がいる部屋に向かっていった。

「お前ら――――！！！！」

ないことに気付く。そしてゆっくりと目をあけるツナ。目の前には一緒に寝ていた鈴々が。しかし鈴々はツナの束縛の理由ではないようだ。では何故？ それは……

「なんで愛紗と馬超が俺のところにいるんだよー！ー！？？」

愛紗がツナの右腕を枕にして抱きつき、馬超が左腕み抱きつき寝ていたからだ。

「いやー。相部屋させてもらった上に飯までおごってもらって悪いなー」

頭を掻きながら言う馬超。ツナたちは宿の朝ごはんを食べていた。

「気にすることはないのだ。旅は道ずれ世は……世は情けないうつし」

「それを言うなら『世は情け』だ」

「まあ、二人部屋に無理言って四人で泊らせてもらっているのは、情けないと言えば情けないけどね……」

「まったく。鈴々たちがあんなに食べるから」

「「えへへへへへ．．．」」

「それより、鈴々はいいとしてなんでみんながオレの布団にいたんだよ？」

ツナがそう言つと、愛紗と馬超の顔が赤く染まる。

「いやー、なんか朝起きたら面白いことになってたからつい．．．
／／／」

「わつ、私は馬超と寝ていたら何度も布団から突き落とされて．．．
し、仕方なく！／／／／」

「えっ！？ そうなのか！？ 悪い！ あたし寝像わるくてさ。あ
たしはてつきり関羽が綱吉と一緒に．．ムゴッ！？」

馬超は何かを言おうとしようとしていたが、それを愛紗は慌ててさ
えぎる。

「ワーワー！！ 何を言っているんだ馬超！」

「？」

ドタバタと騒ぐ愛紗と馬超を、ツナは頭にハテナマークを出しながら
ら見ている。

「なあ、もしかして沢田って．．．」

「ああ、そのまさかだ．．．」

馬超の言葉に愛紗はため息を漏らす。

「まあ、大変そうだけど、お互いに頑張ろうぜ！」

「ああ、そうだな……ん？」

「お！ チャーシューもーらい！」

「あ！ それは鈴々のなのだ！」

「なあ、お互いというのはどういう……」

「いいだろ少しくらい。どーせこんな量食べられないんだから」

「それでも鈴々のなのだ！」

「おい！ 人の話しを……」

「??？」

今日も冀州の天気は快晴だ。

第七席 愛紗VSツナ、来る！（後書き）

鈴々なのだ！ やっぱりツナ兄いは鈍感なのだー。さて、次回の『
真・恋姫？無双 〓大空を司る少年〓』は、

・曹操が襲われた！？

・ついに対面！ ツナと曹操！

なのだ！ みんな、死ぬ気で見るのだ！

第八席 曹操、来る！（前書き）

やべっ、詰まってきた・・・

第八席 曹操、来る！

今日もにぎやかな冀州の街。ツナは馬超と一緒に荷物運びの仕事を終わらせ、ツナが思わず「この時代にもあつたんだ・・・」と言ってしまうほどの、完全なるメイドカフェで働いている鈴々と愛紗のもとに向かっていた。

「今日の仕事、思ったよりお金がもらえて良かったね」

「ま、なんつってもあたしの働きが良かったからな！ 綱吉って戦ってるときは強いのになんで普段はそんなにひ弱なんだ？」

「あはははは・・・」

あながち間違っていない馬超の言葉に、ツナはもう笑うしかない。するとツナは前に人だかりが出来ていることに気付いた。

「あれ？ なんだろ」

「とにかく行ってみようぜ」

ツナは頷きその人だかりの方へ行くと、そこでは丁度軍らしき人たちが馬を引き、列をなして移動していた。よく見ると、その先頭にいるのは先日鈴々に頭クルクルと言われた曹操だった。

「あ、曹操さん。こんにちわ」

「あら？ あなたはこの前の・・・」

「オレ、沢田綱吉って言います。一体何をしているんですか？」

「なに。ちよつと賊をね」

「へー、すごいですね。曹操さんって。(ニッコリ)」

「!?! / / え、ええ。当然よ / / . . . ところで、あなたに少し聞きたいことがあるんだけど？」

「え？ なんです . . . !?!」

その瞬間、曹操の背後からものすごい殺気を感じ取ったツナはとっさに叫ぶ。

「曹操さん、危ない!?!」

「え？」

「曹操!?!」

後ろの兵から奪い取ったのであろう槍を構え、曹操に向かっていたのはなんと馬超だった。

「覚悟!?!?!?!?!」

ガキーン!!

馬超の殺気しか感じられない突きは、曹操の部下である夏侯惇に防がれ、曹操は夏侯惇の妹の夏侯淵に守られる。

「何奴!!」

最初の一撃を防がれた馬超は一旦距離を置き、また槍を構える。

「曹操！ 父の敵、取らせてもらっぞ!!! はあああああ!!!」

そして曹操い突っ込む馬超。しかし、

パシッ!!

「やめろ。馬超」

死ぬ気化したツナが馬超の槍の柄の部分掴み、馬超の突進を止めた。

「!!!!」

ツナのあまりの変わりように、曹操たちは驚く。

「離せっ!! 綱吉!!」

「ダメだ。お前は今我を失っている」

「うるさい!!」

「そこまでだ!!」

凜とした曹操の声。気付くと馬超とツナの周りには槍を構えた兵が囲んでいた。

「ちっ」

「今すぐ彼女を牢に入れなさい。そして、綱吉と言ったわよね？
あなたも私たちと一緒に来てくれるかしら？」

シユウウウウ・・・

「・・・分かりました・・・」

そして馬超は牢に入れられ、ツナは曹操と共に曹操の拠点に連れて
行かれた。

「（さっきのあの炎。一体何なのかしら？ 全て聞かせてもらおう
よ？ 沢田綱吉・・・）」

「そこに座りなさい」

「は、はい・・・」

曹操に半強制的に連れてこられたツナ。曹操は豪華な椅子に座って
いるのに対し、ツナは地面に正座という情けない絵である。

「あ・・・馬超は・・・」

「もちろん斬るわ」

なんとということもなく言つてのける曹操にツナは驚く。

「そんな！？ 理由も聞かないで!？」

ツナの言葉に曹操は鼻で笑う。

「理由はどうであれ、この曹操の命を狙ったんですもの。それなりの報いは受けてもらつわ」

「だ、だけど……」

「官軍の將の命を狙つたのよ？ 無罪放免というわけにもいかないでしょ?？」

「それは……そうですね……」

「そんなことより、私はあなたに質問をするために此処へ呼んだのよ?？」

すると曹操の目がキラんと光る。

「単刀直入に聞くわ。あなた、何者?？」

想像道理の言葉。当たり前だ。いきなり気弱そうな少年が、額い炎を灯し口調まで変わったのだから。

「えっと……オレは沢田綱吉で……愛紗たちの旅仲間で……」

「そんなことを聞いてるんじゃないの」

ピシャツといわれるツナ。夏侯惇は情けないといわんばかりの顔を
している。

「さっきのあれは何？　もしかしてあなたが、最近噂の『大空の御
遣い』？　もし嘘なんて言ったら……殺すわよ？」

笑顔で酷いことを言う曹操。もう曹操の耳にまで入っているのか・
・。そう思ったツナは、本当に殺されたらかなわないので潔く認め
ることにする。

「……はい」

「嘘をつくな！！　お前のような軟弱者があの大空の御遣いなわけ
がなかるう！！」

すると曹操の横にいた夏侯惇が怒ったように言った。ツナはすこし
ムツとして夏侯惇に言い返す。

「本当です。オレは大空の御遣いです」

「貴様っ！！」

「待ちなさい。春蘭」

今にも剣をツナに振りかざそうとする夏侯惇をたった一言で鎮める
曹操。やはりこの人は曹操なんだなとツナは心の中で思った。する
と今度は曹操が口を開く。

「あなた。そこまで言うんなら何か証拠でもあるの？」

「え！？ 証拠！？」

「たとえば・・・そうね・・・さっきの姿をもう一度見せるとか・・・」

それが狙いか・・・。ツナはそう思ったが、今のツナにはそれ以外の自分が大空の御遣いだという証拠がない。ツナは大きなため息をつくと死ぬ気化した。

ボオウ！

「これでいいか？ 曹操」

「（やはり雰囲気が変わるわね）」

「貴様つ、曹操様に向かって・・・」

「やめなさい。春蘭」

またもツナに切りかかろうとする夏侯惇を制する曹操。なんだか少し夏侯惇がかわいそうになってきた。

「それがあなたの能力？ 一体それは何なの？」

「詳しくは言えない」

また怒る夏侯惇。ツナは夏侯惇を無視すると、また話し始める。

「ただ、この炎はオレの覚悟の証。それだけは言える」

「覚悟？」

「ああ、大切な仲間を、あいつらを守る覚悟だ」

曹操は自分を見つめるツナの目をじっと見返すと、小さく「フッフ」と笑った。

「そう。どうやらあなたが大空の御遣いというのは本当のようね。さっそく私のところに来なさい・・・と言いたいところだけど、今のあなたにも守るべきものがあるようだし。今回のところは諦めるわ。馬超も許してあげる」

「華林様!？」

曹操の思いがけない言葉にツナだけではなく夏侯惇も驚いている。

シューウウウ・・・

「ほ、本当ですか!？」

「ええ。秋蘭に関羽と張飛を呼ばせてあるわ。どうせ秋蘭が勝手にいろいろと喋っているだろうし、こんなことで一々怒っていたら私にそばには死体がゴロゴロあるわよ」

曹操がそう言うツナはホッと息を吐く。

「勘違いしないでよね。私はまだあなたを諦めたわけじゃない。い

つか必ずその炎を手に入れて見せるわ。この曹操が・・・」

そう言つて曹操はツナの前から出て行つた。この後もあの人に狙われるのかと思うと少し背中がゾクツとするツナだが、取り敢えずここには愛紗がいるようなのでツナはこの場をあとした。

ツナが愛紗のもとに行くとき、そこには優しい表情で馬超をなだめている愛紗と愛紗に抱きつき子供のように泣いきわめいている馬超、それを邪魔しないようにこっそりとその場を後にしようとしている鈴々と夏侯淵がいた。ツナと夏侯淵は互いの事情を話し、夏侯淵は曹操のもとへもどり、ツナと鈴々は先に宿に戻ることにした。

「よろしかったのですか？ 配下に収めなくて」

ツナを背に歩いてきた曹操に、夏侯惇が話しかけた。しかし曹操は何故か険しい表情をしていた。

「あの綱吉つて子、炎を灯した時の威圧感が半端じゃなかった。もし私が問答無用で馬超を斬っていたら、確実にあなた共々やられていたでしょうね」

「なっ！？ 何を言っておられるんですか華林様！？ 私が負けるとでも！？」

ええ。曹操は即答する。しかしその表情は嬉しそうだ。

「安心しなさい。時間はまだたっぷりあるわ。私の覇行のため、必ず手に入れて見せるわ。……沢田綱吉、面白い子ね」

曹操は空に浮かぶ満月を見ながらそうつぶやいた。

「ここでお別れだな」

次の日、ツナたちは幽州へ向かうため、馬超は故郷である西涼に戻るため、分かれ道で一旦お別れとなった。

「ああ、関羽、あなたにはいろいろ世話になっちまって……」

「なに、気にすることはないさ」

「それと、綱吉」

「ん？ 何？」

「あたし決めた。次綱吉立ちに会った時はあたしは綱吉に付いていく。だからここで真名を預ける。あたしの真名は翠だ」

まさかここで真名を預けられるとは思わなかったので、ツナは少し驚く。

「いいの？」

「あなたは大空の御遣いだろ？ この乱れた世の中は綱吉が良くする。あたしはそう思ったからあなたに真名を預けるんだ」

「まだこの世の中をどうこうするって決めたわけじゃないけど・・・
・分かった。翠の真名、しっかりともらったよ。オレは真名はな
いけどツナっていうのが真名っぽいからオレのことはツナって呼んで」

「ああ、ありがとう」

ツナの言葉に馬超、もとい翠が笑顔で答える。

「ツナ殿が真名を預けるのなら私も預けよう。私は愛紗だ」

「鈴々は鈴々なのだ！」

「愛紗、鈴々、ありがとう。私は翠だ！」

そして翠は西涼に、ツナたち三人は幽州に向かってそれぞれの道を歩いて行った。

第八席 曹操、来る！（後書き）

どもつ、馬超改め翠だ！ えっ！？ もうあたしの出番おしまい！
？ え？ また出られる？ よかった。じゃ、次回の『真・恋姫
？無双』大空を司る少年』は、

・ツナ、星と再会する

だ。みんな、死ぬ気で見るよな！

第九席 再会、来る！（前書き）

久々の更新！ ちなみにここからツナ視点中心で行きたいと思いま
す。

第九席 再会、来る！

「ちよつとすまぬがお主たち」

「はい？」

目的地の幽州に着いたオレたち三人。いざ中に入ろうとしたが、何故か門番に止められてしまった。

「違っていたがすまぬが、お主たち、最近噂の黒髪(くろかみ)の山賊狩りと大空の御遣いではないか？」

門番の質問に愛紗は照れたような顔をする。は、始めて一目で分かってもらえた！

「いやあ、まあそう呼ぶ者もいるようですが自分から名乗っているわけでは・・・／＼／」

けどオレたちのその気分は門番の次の一言で消え去る。

「よかった。近くの村に現れたと聞き、それらしき武人を見かけたら声をかけていたのですが、美しい黒髪(くろかみ)の絶世(ぜっせい)の美女(めいじょ)とのことだったので危うく見逃すところでした」

一気に愛紗の明るい顔が苦笑い(くせうい)に変わる。ヤバい、ちよつと怒ってる？

「そ、そうですか・・・」

「ま、まあまあ」

「御遣いに至っては、荷物持ちかと思いましたが。アッハッハッハ！」

「……………」

「げ、元気を出せ。ツナ殿」

今度は愛紗になだめられるオレ。なんか情けない…………。

「…………グスン」

「そうときまれば早速我が主に伝えねば。少々お待ちを」

そう言った門番は町の方へ走って行った。

「愛紗とツナ兄いは有名人なのだ！」

「ああ、黒髪がな」

「オレ…………荷物持ち…………」

ああ、鈴々の元気が羨ましい…………。

しばらくして戻ってきた門番は、オレたちをこの町を治めている公孫贄っていう人のもとへ連れて行くといい、屋敷の中庭の屋根付きベンチのようなところで待たせた。するとむこうの方からピンクのポニーテイルの少女と何処かで見覚えのある青い髪の女性がやってきた。オレはその女性の方を見ると驚きの声を上げる。

「あー!! 星! なんでここか! ツナ殿!!!」どわ!?

しかしオレは最後まで言葉を発せず、青い髪の女性、星に押し倒されるように抱きつかれた。

「な、何やってんだよ!? 恥ずかしいじゃないか! / / / /」

「いやー、やはりツナ殿の抱き心地は絶品だと思っちゃってな」

「早くどいてー!ー!ー!ー!」

そう言って地面で星に抱きつかれながらジタバタしているオレ。でも何をしても星は一向に離れようとしなない。するとあまりに唐突なことにさっきまで固まっていた愛紗が抗議の声を上げる。

「な、何をしている!? 早くツナ殿からどかぬか!」

「そうなのだ! いきなりツナ兄いの真名で呼ぶなんて失礼なのだ!」

鈴々も愛紗の言葉に同調する。だが星はそれをオレに抱きついたまま涼しい顔で答える。

「何を言っておる。私はツナ殿は互いに真名を交換した仲。何も問題はあるまい」

「え!?!」

星の一言で二人の顔は驚きに染まる。真名ってそんなに大事なのかなあ? 星は二人の内鈴々の方を見た後愛紗を見、そしてオレに話しかけた。

「時にツナ殿? あなたはもうこの子をつくったのですか? お顔の割に手回しが早いすな」

その言葉にオレは理解できず、何故か愛紗が顔を真っ赤にさせた。

「な、何を言っているお主!!! / / / / 私とツナ殿はまだそのよ
うな関係ではなく... しかも! 鈴々は娘ではなく義妹であって
... / / / / 」

「ほう? 『まだ』?」

「~~~~~!!!!!! / / / / / 」

もはや爆発するのではないかというほど真っ赤な愛紗。え? 鈴々がオレたちの子供っていうのは間違いだけど、そんなに怒るほどのことかな?

「なるほど。その鈍感も今だ健在ですか...。お互い大変ですな。黒髪の山賊狩りさん?」

「ああ... まあ... な... 」

わけがわからない。すると今まで空気だったピンクの短いポニーテイルの少女が咳払いをした。

「えー・・・っと、そろそろここへ呼んだ理由を話してもよろしいですか」

「あ、ああ、すみません。それで、オレたちを呼んだ理由って？」

「ええ。ではまずは自己紹介から。我が名は公孫贇、字名は伯珪。太子としてこのあたりを収めている。こちらはお主たちと同じ武者の・・・」

「我が名は趙雲、字名は子龍。ツナ殿とは真名を交わした仲だ」

若干後半部分にこめかみをピクツとさせた愛紗だが、ここは礼儀とあったように愛紗も自己紹介をする。

「お招きいただけ光栄です。私の名は関羽、字名は雲長」

「オレの名前は沢田綱吉。字はありません。それで、こっちが・・・」

「鈴々なのだ!!」

突然真名で自己紹介をする鈴々。真名って神聖な物じゃなかったの!?

「ちよ、コラ鈴々!」

「真名ではなく、ちゃんと名乗って挨拶せぬか！」

鈴々を叱るオレたち。はたから見たらホントに親子みたいだなあ。オレと同じようなことを思ったのか星はいたずら小僧のような目で愛紗とオレを見る。

「やはりお主ら・・・」

「だから違う！！！！／＼／＼」

全力で否定する愛紗。そんなに夫婦と間違えられるのが嫌なのかな？ それともオレが嫌い？

「ま、まあその話は後にしておいて・・・実はお主らに、折り入って頼みがあるのだが」

急に真剣な顔になる公孫賛さん。場の空気がガラリと変わり、星も愛紗も真剣な顔をする。

「私たちに？」

「辺境の領氏ではあるが、この公孫賛、今の世を憂いる気持ちは人一倍あるつもりだ。冀州の袁紹、江東の孫策、都で最近頭角を現してきた曹操と、天下に志を抱くものは皆無為の人材を求めているのだ」

公孫賛さんの言葉に以前曹操さんと会ったことをオレは思い出す。あの時はホントに怖かったなあ。公孫賛さんは話しを続ける。

「乱れに乱れたこの世の中を正すため、お主らの力を是非私に！」

「いや、私たちはまだ誰に従えるとかは・・・」

「そこを何とか！！ 私にはお主らのような人材が必要なのだ！」

熱く語る公孫贄さん。その熱意に押されたオレたちはなんとか交渉をして、数日ここで客将をするだけになった。

そんなある日、

「来ましたか。沢田殿」

「遅いぞ、ツナ殿。何をしていたんだ」

「ごめんごめん。ちょっと街の子供の相手してたから」

オレたちは突然公孫贄さんに呼ばれた。

「で、何の用ですか？ 公孫贄さん」

本題に移ろうとする星に公孫贄さんは頷く。

「うむ、恥ずかしながら山賊退治にてこずっていてな。奴らの出沒している範囲から考えて、賊の隠れ家が赤銅山しやくどうさん山中にあるのは確か

なのだが、それらしき砦が見つけられず、討伐隊を出すことも出来ないのだ」

「なるほど、それは厄介ですね・・・」

たしかにうかつに兵隊を動かせば回り込まれて返り撃ちに会うかもしれないし闇雲に搜索させれば兵のムダだし街の警備が薄くなる。

「ならばこついつのはどうだろうか？」

すると星が何かを思いついたようだ。

「なにか策が？」

「うむ、偽の対象をしたててその荷物の中に潜む。これをわざと賊に奪わせて隠れ家に忍び込む。つまり、賊自ら隠れ家の案内をさせるという寸法だ」

「なるほど、それは面白い」

星の作戦に食いつく愛紗。しかし公孫贇さんは心配そうな顔をする。

「し、しかし単身で賊の隠れ家へ行くなど・・・」

「虎穴に入らずは虎兇を得ず。狡猾な賊を滅するには、多少の危険はやむを得ぬこと。どうだ関羽殿にツナ殿、私と一緒に賊の隠れ家を訪ねてみぬか？」

「引き受けた」

そしてオレの方を見る星と愛紗。公孫贄さんの意見に贄成だったけど、ここは断っちゃだめだよな。

「うん、分かった」

「よっ……と、ここに隠れるんだ」

今オレたちは隠れる木箱の確認をしている。いやー、あの後鈴々が「鈴々も行くのだー!!!」ってうるさくてなだめるのに苦労したよ。今思ったけど鈴々ってなんかランボみたいだよな……。

「うむ、少々窮屈だが、やむをえまい」

確かにこの箱は三人がやっとで入るくらいの大きさだ。……ってあれ？ これってもしかして……

「この中に三人が入るとなると、相当体をくつつけなきゃダメだよね？ オレなんか入っても大丈夫かな？」

「なに、お主は身が細いから大丈夫だろう」

いや、愛紗さん、オレが心配してるのはそこじゃないんですけど……。ほら、愛紗たちの……胸とかが……。すると星が何故かこちらを見てニヤニヤしました。

「ほう、ツナ殿も男。下心は御有りのようだな」

「なっ、なんでそういうことになるのさ!？」

「なら、先ほどから私たちの胸をチラチラ見ていたのは何故ですか
な？」

「な!?!?!」

き、気付かれてた!？

「ほう、本当でしたか」

こいつ引っかけた!？

「ツ、ツナ殿……!?!?!」

あ……そんな目でオレを見ないでくれ愛紗……

「はははっ! やはりツナ殿はからかいがある!」

星、いい加減にしてくれ……。

第九席 再会、来る！（後書き）

やあ、星だ。やはりツナ殿は面白い。さて、次回の『真・恋姫？無
双』大空を司る少年』は、

・ツナ、賊の隠れ家に侵入す

だ。皆の者、死ぬ気で見るのだぞ。

第十席 ツナの本気、来る！（前書き）

後半はずっと死ぬ気化です。口調とか気付いてくれるかな・・・って、あんまり本気じゃないよな・・・これ・・・

第十席 ツナの本気、来る！

ガラガラ・・ガラガラ・・

この時代どこにでも見るような積み荷を運ぶ人たちの風景。その風景の中の、しかも人ではなく荷物のほうにオレたちはいた。

「（ちょっと、二人ともそんなにくつつかないでよ／＼／）」

「（し、仕方ないではないか！ これほどの狭さなのだから／＼／）」

「（と、言いつつさらに抱きついているのは何故ですか？ 関羽殿）」

「（ち、趙雲殿！？／＼／）」

「（ちょ、動かないでよ！ あ、足が・・胸が・・／＼／）」

運び人さん、ホントすみません。心の中でオレたちを運んでくれている人にお詫びを言っていると、突然斜め前の方から男たちの声が聞こえた。

「う、重いんだな」

「しっかり運べよデク、それで最後なんだろうーな」

「そうなんだな。よっこいしょと・・・」

うわっ

「ん？ 今男の声がしなかったか？」

「はあ？ 何言ってるんですか兄貴？ 女ならともかく男の幻聴なんて兄貴そんな趣味があったんですかい？」

「馬鹿言ってるじゃねーよ。本当に聞こえたんだぜ？」

「はいはい、分かりましたから行きましょーねー」

「つかしーなー」

キィ・・・バタン。

.....

「大丈夫・・・のようだな」

「ぶはっ！！ はーっ、はーっ、はーっ、はーっ・・・／／／／」

し、死ぬかと思った！！ いろんな意味で！！ なんでこの人たち
思いつきりオレに抱きついてくるんだよ！？ 胸とかそれ以上に、

耳にかかる息がシャレにならないって！

「どつやらここは地下のようだな」

「はーっ、はーっ、地下？」

オレのドキドキとは逆に、星は冷静にそう言う。

「うむ、行くぞ」

「あ、ちょ、待ってよ」

オレの呼びとめにも聞かず扉を開けて進む星に追いつくため、オレも扉を開けて外に出た。つて愛紗、なんで抱きついてきた本人が顔を赤くしてブツブツ言ってるの。

「おそらくここは昔鉱山だったのだろう」

「なるほど、いくら探しても見つからぬはずだ」

あれから数十分。オレたちはどつやら鉱山の鉱道に連れてこられたようだ。

「思った以上に広いね」

「そうですね。これでは出口を探すのに一苦労。まったく厄介な場所を隠れ家にしたものだ」

「しかし、敵中であって得物がこれとは、いささか心もとないな」

そう言つて服の中から短剣を取り出す愛紗。確かに愛紗たちは槍をいつも使つてるからね。すると星が呆れたような口調で言った。

「やむをえまい。お主の乳が邪魔でこれ以上大きな武器が入らなかつたのだ」

「む！／＼／＼ べ、別に私の胸だけが場所を取っていたわけではあるまい！」

「ふむ、確かに乳よりもお主の尻の方が場所塞ぎであつたかもしれぬな」

「な！？／＼／＼ そんなことはない！ そうであるう！？ ツナ殿！」

「え！？ オレ！？」

いきりオレに振らないでよ！ オレいちを男だよ！？

「正直に言つてよいのですぞ、ツナ殿。関羽殿は乳より尻の方がでかいと」

星も愛紗をそれ以上からかわないでよ。どう答えていいか分からないじゃないか。オレが愛紗のまつたく意味のわからない質問にウー

ンウーンとうなっていると、突然星の顔が険しくなった。

「シッ」

口に人差し指をつけて『黙れ』の合図をする星。それに従ってオレたちが口を閉じて耳を澄ますと、何処からか男たちの声が聞こえた。

「こっちだな」

声のする方へ進んでいく星。それに続いてオレたちも行くと言った男たちの声は大きくなり、一つの広場のような場所にたどりついた。そこでは男たち、盗賊たちが盗んできた食べ物をむさぼり、捕まえてきた女の人に酌をさせていた。

「いやっ！ やめてください！！」

ここからでも聞こえる女の人の声。隣ではオレと同じように愛紗が怒りに震えていた。

「おのれ賊どもめ、成敗してくれる！！」

怒りに任せて盗賊のもとへ行こうとする愛紗を星が止める。

「待て関羽殿！ どうするつもりだ」

「どうするも何も助けに行くに決まっておろう」

「とはいえ、相手はあの人数だ。我らの使命はこの隠れ家の場所を・
・おい！」

星の言葉を最後まで聞かず、愛紗は盗賊の中へ飛び込んで行ってしまった。

「さて、どうするのですか？ ツナ殿」

ジト目でオレを見ながら多分想像はついていると思う質問を聞いてくる星。そんなの決まってるよ。

ポオウ！！

「もちろん、愛紗と女たちを助けに行く」

「はあ、でしような。ま、そういうところに惚れたのですが・・・」

「何か言ったか？」

「いえ、なんでも。では私が明りを消しますのでその隙に・・・」

「分かった」

そう言っただけでオレは暗闇になるまで待ち、星は明りの火を消しに行った。その時星の顔が若干赤かったのは気のせいかな。

【愛紗SIDE】

私は趙雲殿の話しを最後まで聞かず、賊どもの中へ飛び込んで行った。

「下郎！！ 覚悟！！」

そしてこの賊のなかでおそらく大将であろう男を蹴り飛ばした。

「ぐへえあ!?!」

ガッシャーーン!!

「大丈夫か?」

そう言っつて私は蹴り飛ばした男の酌をしていた女の無事を確認する。良かった。どうやら怪我はないようだ。すると突然のことで固まっていた賊どもが私たちを囲む。

「な、何だデメエーは!?!」

「我が名は関羽! 字名は雲長! 地下に巢食つ姑息な賊どもめ! まとめてこの青龍偃月刀の錆びにして……っであれ!?!」

し、しまった! 青龍偃月刀は持ってきてなかったんだ!

「何の錆びにしてくれるんだって?」

「くっ」

どうやら賊どもは自分たちが有利だと気付いたようだ。私は唯一の武器の短剣を抜く。しかしこの武器でこの数は流石に危険。どうする……。その時、

「関羽!」

私の名前を呼ぶ声、私と賊が声のする方を見ると、そこには趙雲殿

がいた。

「趙雲殿！」

趙雲殿は頷くと手に持っていた石を掛り火に投げる。石が当たった掛り火は倒れ、火が消える。次々と倒れる掛り火にあわせて暗くなる広場。そしてついに辺りは真っ暗になった。しかしただ一つ、むこうの方に橙色の明かりが見えた。その明りは一気にこちらに近づいていき、私のもとへやってきた。

「こつちだ。愛紗」

「ツナ殿!？」

あの明りはツナ殿の額の炎。私は手を引かれ、女を連れてその場を出て行った。

【SIDE OUT】

「……びびりながら追ってきてないようですね」

「そっか」

シューウウウ……

「だ、大丈夫？ 愛紗？」

「ああ、ありがとうツナ殿」

オレの言葉にそう答える愛紗。星は呆れ顔で愛紗に言った。

「まったく、猪武者なのは妹分だけかと思っただら、お主も相当なものだな」

そう言われると愛紗は苦笑いするしかないようで「あははは・・・」
と言っている。すると愛紗が連れてきた女の人が話しかけてきた。
遠くからじゃ分からなかったけど、女の人ってよりも女の子かな？

「あの・・・危ないところを助けて頂きありがとうございました。
私は、この山のふもとにある村の者ですが、村の子供たちと山菜摘みに山に入ったときの帰りに、偶然此処への出入り口を見つけてしま・・・」

「なるほど。それで捕まったというわけか」

「実は、ここの地下牢に村の子供たちも捕まっています。もし、私が逃げ出したと知れたらあいつらに何をされるか」

そしてすすり泣く女の子。

「どつするつもりですか」

「当然、助けに行くよ」

「やはりですか。・・・ならば娘、お主その子供たちが捕えられている場所は知っているのだな？」

「え、あ、はい・・・」

「案内、してくれるかな？」

「は、はい！ こっちです！」

そう言っただけで元気を取り戻した女の子は走り出し、オレたちはその後をついて行った。

「な、何だデメエは!？」

「少し眠っている」

シュパッ！ ドスッ

「ぐ・・・は・・・」

ドサッ

「行くぞ」

「まったく、相変わらずツナ殿は容赦がないな」

そう言つてハイパーツナになりそこにいた賊を気絶させたオレの合図と共に通路の影から出てくる愛紗、そして女と星が出てきた。よく見ると女がオレに少し怯えているように見える。そんなにオレが怖いか。そういう言っている内にまた女が先頭になり走り出す。そしてとうとう地下牢にたどりついた。

「ここです」

「おかしい、賊が一人もいないぞ」

「畏、か？」

確かに地下牢には子供の声が聞こえるだけで賊の気配が全くしなかった。だが今はどうでもいい。

「考えるな。今は子供たちを助けるのが先決だ。行くぞ」

「うむ」

「分かった」

「ありがとうございます」

そして地下牢に入るオレたち。やはりと言つていいのか、牢には子供たちしかいなかった。女は子供たちを見た途端に牢に駆け寄る。

「みんな！ー！」

「「お姉ちゃん!!」「」

「今開ける。ここから離れる」

オレはそう言うと、牢の扉を無理やりこじ開けて中の子供たちを出す。

「良かった・・・」

「お姉ちゃん・・・」

そして抱き合う子供と女。どうやら星たちも満足そうだ。

「よかったな、お主」

「はい!」

「安心するのはまだ早い。一刻も早くここから出て・・・!!!!」

次の言葉を発しようとした瞬間、超直感で感じられた殺気にほぼ反射で後ろを振り向き防御の姿勢をする。刹那、グローブに衝撃が伝わってきた、男の舌打ちが聞こえてきた。炎の光で見えたその顔は、まぎれもなく先ほど愛紗に蹴られて気を失った賊であった。気付くと入り口は男たちで埋まっていた。

「やはり畏だったか」

「なんだあ？ 大空の御遣いってのはどんな奴かと思ったらただの餓鬼じゃねーか。拍子抜けだぜ」

そう言いながらも男は剣をオレに押し付ける。

「おのれ！ ツナ殿を侮辱するとは！」

「やめろ、愛紗」

短剣を握りしめる愛紗を制す。

「しかし！」

「オレのことで怒ってくれるのは嬉しいが今は子供たちを逃がすのが先だ」

「ハン！ この状況でどうやって逃げるんだよ！」

「黙れ」

「ぐはっ！？」

オレは剣を押し付けていた男の腹を蹴り飛ばし、後ろにいた賊たちに返す。そしてオレは星達の方角を向き、三人の子供を抱えて走り出した。

「行くぞ」

「え、あ、ツナ殿！？」

「御意」

「ちよ、趙雲殿！」

よし、他の三人も子供たちを抱えてついてきてるな。オレは超直感を使い他に出口はないか探す。数か所出口は見つけたが、何処の出口も賊たちに塞がれていた。

「ちっ、こっちもか」

「ツナ殿、こっちだ！」

追いかけてくる賊。しばらくオレたちは走り、そしてついに外の光が見えた。

「!!! 外だ！」

歓喜の声で叫ぶ愛紗。しかし現実はそう甘くはなかった。オレたちが出てきたのは切り立った深い崖だった。

「! 賊が来ちゃう！」

男の子の言葉で全員が耳を澄ますと確かにすぐ近くにもう賊が来ていた。どうする。とその時、

「ツナ兄いーいー!!! 何してるのだいーいー?」

「「鈴々!」」

なんと崖の向こうに公孫贊のところ置いて行った鈴々がいた。そのことに愛紗も驚いているようだ。

「鈴々こそ何してるんだ！」

「愛紗たちが心配だからに決まってるのだ!!」

すると愛紗が何かを思いついたようだ。

「鈴々! その木をこっちに向かって切り倒せ!!」

なるほど、あの木ならこっちに届くかもしれない。

「え? なんでなのだ?」

「いいから早く!!」

「わかったのだ!! てりいやー!!」

ザクツ!! ギギギ・・・ボタン!!

よし、なんとか届いたようだ。

「これを渡って、むこうに逃げるんだ」

愛紗がそう言うのと女と子供たちは木を渡って向こう側に逃げて行く。すると賊どもがついに此処にたどりついたようだ。

「まずいな、急げ!!」

そう言いながら賊を牽制する星。子供たちはなんとか焦らずに向こう側につく。しかし最後の女が向こう側に足を付けた途端、愛紗の足元が崩れ始めた。

「え？ きゃあー!!」

「愛紗!!」

ガシッ!!

「くっ……う……」

危なかった。オレはギリギリのタイミングで愛紗の腕を掴み、引き上げる。

「大丈夫か？」

「す、すまない……。それより橋が……」

下を見るとさつきまで橋だった木が、今では地面で真っ二つに折れている。これで唯一の逃げ道が断られた。

「万事休すか……」

賊はもうそこまで来ている。オレは少し大げさだが最終手段を取ることにした。

「星、愛紗、下がっている」

「ツナ殿？」

オレは愛紗と星の前に立ち、スパナに折りたたみ式にしてもらっていたヘッドフォンをつける。コンタクトは何時もつけているから問題ない。

「愛紗、前に全力のオレと戦いたいって言ってたな」

「あ、ああ。そうだが？」

「オレと全力で戦うって言うのは、こういうことだ」

オペレーション・X^{イクス}

【愛紗SIDE】

「オペレーション・X^{イクス}」

意味が分からない言葉を言い、右手を後ろに突き出したツナ殿。一体何をするのだ？　すると突然右手に灯っていた炎が横に広がりました。

「な、何なのですかこれは!？」

どうやら驚いているのは私だけではないようだ。

「少し黙っている」

たった一言そう言うツナ殿。それだけで趙雲殿は押し黙ってしまった。

「なんなんだ、あの炎は・・・」

さらに大きくなる炎。さらには左手まで輝き始めた。そして左手の輝きがひときわ大きくなった時、

「Xバーナー」
イクス

ドバーーーーーーッ!!!!!!

それは放たれた。

「ぐわーーーーー!!!!!!」

「だーーーーー!!!!!!」

放たれたそれに巻き込まれる賊たち。岩などまるで豆腐のように削れていく。

「これが……ツナ殿の本気……」

私などまだツナ殿からしてみれば赤子に近い。私はそう感じた。これがツナ殿、大空の御遣いの本気。光が消えたころには何も残ってなかった。

【SIDE OUT】

「でも、よかったの？ オレたちは仕官するつもりはなかったけど、星はあのまま公孫贖さんのところにいたら一人の将として兵を任せ

られたのに・・・」

今、オレたちは公孫贇さんのところを離れ、森の中を歩いていた。公孫贇さんの役を奪ったのは、ちよつと悪かったかな・・・。

「公孫贇殿は決して悪い人物ではない。ただ、それだけだ。この乱世を収めるような器ではないし、影も薄い」

「趙雲殿、何気にけつこうきついこと言っていないか？」

「星だ」

「え？」

「同じ死地に赴いたのだ。これからは私のことは星と呼んでくれ」

「分かった、星。ならば私も真名で呼んでくれ。私は愛紗だ」

そう言つて笑いあふ愛紗たち。仲良くなってよかったな。

「それに、」

「どわっ！／＼／＼／」

「やはり私の主はツナ殿らしい」

だ、だからいきなり抱きつかないでよ！！／＼／

「せ、星！／＼／」

「なにをやってる星!!!!/!/!/」

「やはりツナ殿は面白いな!!!!」

む、胸が~~~~~/!/!/!

第十席 ツナの本気、来る！（後書き）

公孫贖だ。うゝ、私の活躍が……ん、ん！ さて、次回の

『真・恋姫？無双 ～大空を司る少年～』は、

・ツナ、触角の動物愛好家に出会う。

だ。皆、死ぬ気で見るのだぞ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2939t/>

真・恋姫?無双 ~大空を司る少年~

2011年10月8日22時13分発行